

十全同窓会会報 187

2024 / 5



目次 | CONTENTS

令和6年能登半島地震……………03	金沢から世界へ発信……………27	謝恩会……………41
卒業生に贈る言葉……………12	受賞・学会報告等……………28	学生課外活動報告……………42
就任挨拶……………13	第2中央診療棟竣工……………32	金沢大学医学生と 「生と死」を考える……………44
退職のご挨拶……………22	医師国家試験結果……………33	学生コーナー……………46
退職記念講演会……………24	病院紹介・教室だより……………34	令和6年3月卒業生進路 ……47
佐藤保教授を偲んで……………26	支部だより・クラス会……………38	

令和6年能登半島地震のお見舞い 災害救援募金中間報告

令和6年能登半島地震により被災されました十全同窓会会員ならびにご家族さまに、心からお見舞いを申し上げます。

十全同窓会会報186号・同窓会ホームページ・メーリングリストなどを介して、令和6年能登半島地震により甚大な被害を受けた能登北部基幹病院への災害救援募金をお願い申しあげましたところ、短期間に多くの募金を賜りました。誠にありがたく、篤く御礼申しあげます。募金の状況、能登北部同窓生への経済的支援について、中間報告を申し上げます。

2024年4月12日現在、710件(4団体を含む)、¥27,174,000.-の募金を頂戴しております。このうち¥20,000,000.-については、2024年3月5日に、市立輪島病院ならびに珠洲市総合病院の病院長宛に¥10,000,000.-ずつを送金いたしました。募金の残金については、同窓会会計からの募金を加え、全額を追加送金いたします。

本募金は、2024年6月28日(金)午後11:00を以て、一旦中締めといたします。

募金にお力添えを下さる同窓会員の皆さまにおかれましては、以下の送金方法のいずれかを經由して募金をお寄せください。

募金額は一口1万円とし、2口以上をお願いいたします。

① **下記銀行口座**へ直接振り込みが可能です

北陸銀行 小立野支店

普通預金 6051047

金沢大学医学部十全同窓会 令和6年能登半島地震災害救援募金

(お振込の際は、ご氏名の前に**会員番号もしくは卒業年**のご入力をお願いいたします)

② **郵便振り込み用紙**を同封しておりますのでご利用ください

領収書は、払込取扱票の受領証をもって代えさせていただきます。

募金に対する免税措置はございませんので、予めご了承ください。

最終的な募金会計のご報告は、2024年7月6日(土)に予定されている十全同窓会総会、ならびに同窓会会報、同窓会ホームページでお知らせいたします。十全同窓会会員各位から頂戴したご支援に、重ねて感謝申し上げます。

2024年4月吉日

金沢大学医学部十全同窓会会長 山本 健

令和6年能登半島地震 | 緊急特集 |

金沢大学附属病院の活動状況

金沢大学附属病院長 **蒲田 敏文**
(昭和58年卒業)

令和6年1月1日夕方に発生した能登半島地震に対する金沢大学附属病院の対応についてご報告いたします。

- ・1月1日の地震発生後、18時に附属病院災害対策本部を設置。附属病院ならびに第2中央診療棟(新棟)には損傷は全く見られないことを確認。翌日より毎朝対策本部会議を開催
- ・地震発生翌日より能登の病院からの震災関連患者の受け入れを開始(附属病院

は200名を超える重症患者を受け入れ)

- ・1月1日(月)～1月3日(水)：市立輪島病院にDMATチームを派遣(医師、看護師、事務職員)
- ・1月4日(木)～1月22日(月)：DMAT指揮所(活動拠点)を附属病院に設置
- ・1月19日(金)～能登地域避難所：血栓症が疑われる方へのエコー検査と診断などを実施
- ・能登地域の病院・避難所、1.5次避難所

(いしかわ総合スポーツセンター)、2次避難所への職員の派遣(医師、看護師、薬剤師、栄養管理士、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、救命救急士、事務職員等)

以上、附属病院は職員一丸となって能登の病院への人的支援、避難住民の健康管理、重症患者の治療等を行ってまいりました。今後も支援活動を続けてまいります。



輪島市内を走る車内から(DMAT隊員)



能登の病院からの重症患者受け入れ



七尾市矢田郷コミュニティセンターでの診察

JMAT活動の初動について

一石川県JMAT調整本部の立ち上げ一

石川県医師会副会長・芳珠記念病院名誉院長 **上田 博**
(昭和47年卒業)

日本医師会災害医療支援チーム「Japan Medical Association Team (JMAT)」は、災害が起きた際に日本医師会が被災地外の都道府県医師会ごとにチームを編成し、被災地の医師会からの要請に基づいて派遣を行い、主として発災後の急性期以降を担うのがコンセプトである。「JMATが去っても、被災地医師がもう一度ここで診療をしていきたいと思えるよう、長期的な視点で支え、想いに寄り添いながら、行政と一緒に地域医療を守る」を行動指針として、能登半島地震における石川県JMATは活動した。その実現のために、被災地診療機関の診療支援、被災地医師や地域行政と協働しながら施設や避難所の巡回を行ってきた。この場をお借りして石川県JMAT調整本部の立ち上げから約1カ月間の初動についての経験を十全同窓会会員の皆さまに伝えたい。

東日本大震災の一年前に、日本医師会の会内委員会「救急災害医療対策委員会」よりJMATの創設が提言された。実は大震災直前まで、研修カリキュラムなどを検討していた。2011年3月、東日本大震災が発生した。それを受け急ぎょ全都道府県医師会に派遣要請を発出し、2,763

チーム、延べ12,628名を被災地に派遣した。その後熊本地震や各地の豪雨災害に対しても派遣を行ってきた。

さて今回の能登半島地震では、1月3日朝、安田健二石川県医師会会長とともに石川県庁11階にある災害派遣医療チーム(DMAT)本部に入り、直ぐに地震の被害状況やDMAT初期活動についてオリエンテーションを受けた。部屋の中にはロジスティクスチーム、情報分析、病院避難、透析、物資支援など各部門別にグループがすでにつくられ、大勢のDMATメンバーが忙しく活動しており熱気に溢れていた。早速JMATの部署が割り当てられた。午後には馳浩知事から知事室にてJMAT編成の依頼を直接受けた。そこでまず現地を見て情報を得ることが先決であることから、石川県医師会から理事と事務局員が3日の午後に先遣JMATとして情報収集のため能登方面に出発した。しかし道路寸断や渋滞のため七尾市まで行くのが限度であった。被災地では建物倒壊による死者が次々と報告されており、全域にわたって断水で水が使えず、DMAT本部ではまず透析患者の搬送が最優先の課題であり、夜遅く

までかかり対策が立てられた。4日までに恵寿総合病院以外の透析患者のほぼ全員が金沢市以南の透析可能医療機関へ陸路と空路で搬送された。また、能登北・中部の病院は機能不全に陥り、特に高齢化率が50%を超える能登北部では、高齢者施設や福祉施設も多く、入院患者や入所者の病院避難のための搬送が急務であり、県内ばかりでなく県外への搬送を陸空で行う計画が立てられた。そのため金沢市以南の多くの病院が協力し、後に定員オーバーの状態でも多忙を極める事になった。

1月4日午後、愛知県医師会会長と日医常任理事が日医推薦の救急専門医で指導医でもある秋富慎司医師や日本医師会事務局員と共に来県した。ヒアリングと共にJMAT調整本部立ち上げのアドバイスを得た。翌日の5日には石川県医師会から七尾経由で穴水町へ先遣JMATを派遣した。引き続き東日本大震災での経験がある病院からJMAT編成の継続した派遣をお願いしていくことになった。JMAT調整本部組織の立ち上げは、秋富先生への東日本大震災などでの豊富な経験に基づき、その的確な指示のもとに行われた。石川県医師会災害対策本部と石川県JMAT調整本部(写真1)、その後3つの調整支部(図1)が設置され、それぞれ綿密な情報共有とともに多くのJMAT派遣の調整を行っていくこととなる。道路の寸断と断水の長期化が今回の災害の大きな特徴であり、道路と宿泊所の確保ができないことなどがJMAT派遣の障害となった。これが少しずつ解消されるとともに、七尾から能登北部方面の医療支援が徐々に可能となった。当初は診療所や自宅が全壊や半壊し、診療を行うことができない先生が大半であった。特に輪島市は悲惨な状況であった。自身が避難所生活を強いられながら避難所での巡回診療を行っている先生も何人かおられた。そ



写真1

写真2



の後刻々と変化するニーズを確認しながら、JMAT調整本部は診療所支援、避難所や高齢者施設の医療支援の調整を行っていった。全国からの多くの有用な人材が支援に駆けつけてくれてありがたかった。

一方、1月3日には松本日医会長から都道府県医師会に対してもJMATの派遣要請がなされた。また日医から派遣されたロジスティクス担当職員のてきぱきとした調整能力には感心させられるとともに、ロジスティクスの重要性を痛感した。初動にはこういった経験者が重要であり、訓練ではこういった実務面はなかなか習得できないと思う。石川県医師会としてはJMATを派遣した経験はあるが、被災地としての調整本部設立は初めてであり、何をどこからすれば良いのか途方に暮れている状態であったため大変有り難かった。

発災早期から災害関連死防止のため能登の多くの住民、特に高齢者や障害を持った方の金沢市以南のホテル、旅館や民泊などへの2次避難が行われた。そのトリアージ目的で大型の1.5次避難所が金沢市のいしかわ総合スポーツセンター、産業展示館と小松市総合体育館に設置された。医療や介護を必要とする方が続々と避難され、予想より多くの医

療・看護・介護・福祉支援が必要となった。そこで金沢市や小松市医師会にその医療支援を要請したところ、2次避難した方などの診療で多忙の中、JMATとして1.5次避難所での医療支援を引き受けていただいた。金沢大学病院からも研修医を含めた多くの先生方がJMATとして、1.5次避難所での診療、またDVT予防、糖尿病や褥瘡など専門分野において積極的に活動した。和田隆志金沢大学学長、蒲田敏文病院長(当時)や宮澤克人金沢医科大学学長にも馳知事と松本吉郎日医会長との意見交換会に出席していただいた(写真2)。紙面を借りて深謝したい。全国の多くの医療関係者の支援があつてなし得たことであるが、JMATが巡回診療を行った避難所からは災害関連死が1例も発生していないとのこと、誇りとしたい。

災害支援にはDMAT、JMAT、日本赤十字社、災害派遣精神医療チーム(DPAT)、日本災害リハビリテーション協会(JRAT)、災害派遣福祉チーム(DWAT)、災害時健

康危機管理支援チーム(DHEAT)、日本栄養士会災害支援チーム(JDA-DAT)など多くの団体の相互協力が必須である。また災害支援の活動はDMATなど急性期に集中的な活動である一方、JMAT、DPATやJRATは長期にわたって息の長い支援活動が求められている。しかし今回は被災地の特殊性からDMAT活動は1カ月以上におよび、日赤やJMATとともに長期の支援を余儀なくされた。世界各地で地震や洪水などの大災害が頻発しており、災害の特徴に併せた支援団体の活動が重要になってくることが予想される。あらゆる機会を通じてさまざまな経験しておくことを若い世代に伝えたい。

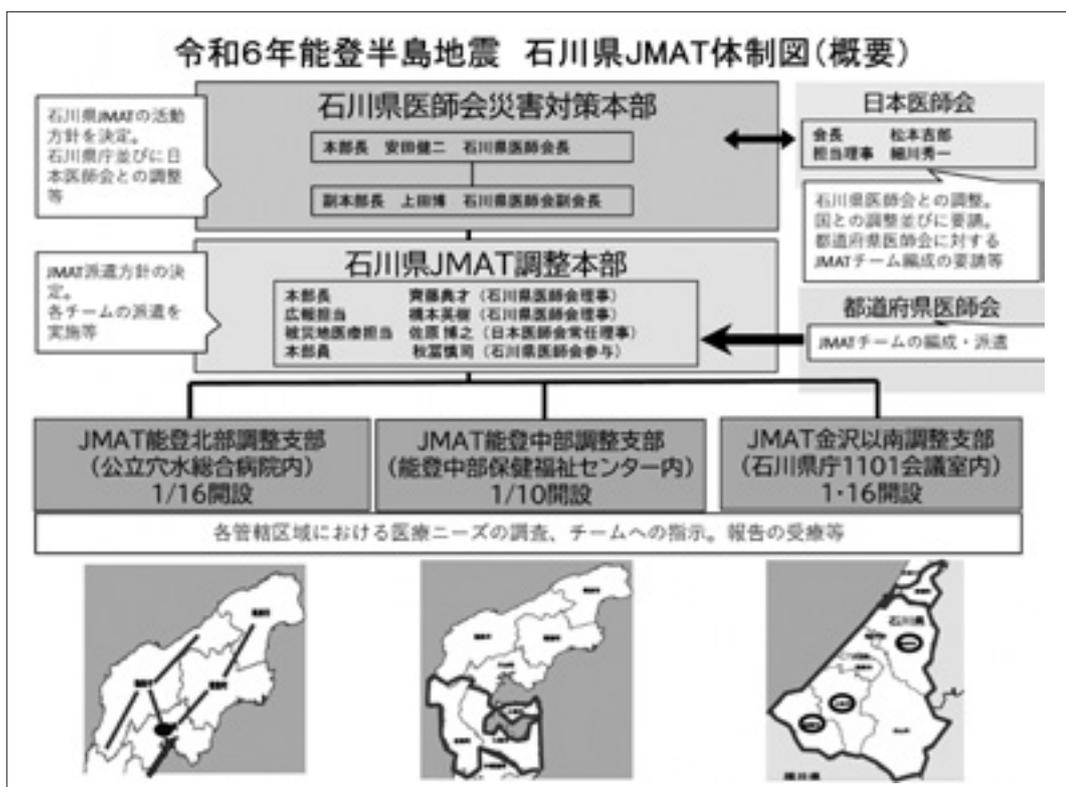


図1

糖尿病医療支援チームの活動について

石川県糖尿病対策推進会議代表、石川県医師会理事
北陸先端科学技術大学院大学保健管理センター センター長・教授 **古川 健治**
(平成4年卒業)

能登半島地震により多くの糖尿病の方が被災したが、この方たちは、食事や身体活動量などの生活環境の変化が病状に深く関わり、インスリン等の注射製剤を使用している方も多いため、病状の悪化が懸念された。また、災害関連死に関係し重要だったのは深部静脈血栓症と感染症対策であるが、いずれも糖尿病が深く関わっており、災害関連死予防のためにも被災地の糖尿病の方への支援が必要であろうと考えられた。この方達を支えるため糖尿病医療支援チームとして活動したので、十全同窓会会員の皆さまにお伝えしたい。

石川県糖尿病対策推進会議は、石川県医師会、石川県と協同して、県民の糖尿病重症化予防に努めてきたが、今回の能登半島地震にあたり糖尿病の方への支援が必要と考え、古川は、発災後1月3日より内分泌・代謝内科の篁俊成教授と情報交換を行ない、活動を始めた。1月7日には、石川県庁内に設置されていた、災害派遣医療チーム(DMAT)調整本部、日本医師会災害医療チーム(JMAT)調整本部、石川県医師会災害対策本部と連携して、被災地におけるインスリンをはじめとした糖尿病治療薬不足の情報を収集する体制を構築した。実際、翌1月8日にはDMAT調整本部よりインスリンが切れかけていた1型糖尿病の方の情報がもたらされ、これに対応した。一方、日本糖尿病協会は日本糖尿病学会と協同し、2023年11月糖尿病医療支援チーム(DiaMAT)を立ち上げ、防災教育から発災時の支援まで、糖尿病の方を災害に対して支えていく対策を講じていた。1

月10日糖尿病協会から現地調査のため、熊本地震で活動実績があったチームが先遣DiaMATとして派遣され、石川県医療福祉介護調整本部にて調査を行った。石川県においてDiaMATは組織されおらず、古川は、篁教授、研修医・専門医総合教育センターの米谷充弘准教授、内分泌・代謝内科の中野雄二郎助教とともにこれに同行し、以後石川県においてDiaMATとしても活動することとなった。

DiaMAT単独では被災地における活動が難しいと考えられたが、その活動意義が理解されたためJMATの枠組みで派遣できることとなった。その中で、古川は、石川県医師会災害対策本部と連携しながら、日本糖尿病協会内のDiaMAT調整本部と、JMAT調整本部及び被災地に設置されたJMAT調整支部間で、派遣チームの調整を担当した。また、金沢大学内分泌・代謝内科は、DiaMATの糖尿病関連医療物品の手配、現地医療機関と

の調整を担当した。DiaMATの避難所における具体的な活動としては、インスリンや内服薬、低血糖に関するアドバイス、食事や運動などのアドバイス、フットケアなどが挙げられるが、実際の被災地への派遣は1月20日に開始された。篁教授は、第一陣として自ら能登中部の避難所を回って医療支援を行い(写真1)、その中で糖尿病腎症によるネフローゼ症候群が増悪して全身性浮腫を認めた症例、自己判断でインスリンを中止し高血糖を認めた症例に介入を行い、現地医療機関と連携した。また福井県DiaMATとして、福井県糖尿病協会会長の笈田耕治先生(昭和54年卒業)にも活動していただいた。その他、九州、関西から、2月下旬まで計6回9チームが派遣され、DiaMAT活動を行った。3月以降も活動予定であったが、被災地の地域医療が復旧したために終了した。

金沢大学内分泌・代謝内科は、糖尿病



写真1 第一陣として七尾のJMAT能登中部調整支部で活動したDiaMAT(写真右、篁教授)

の方のみならず内分泌疾患の方も含めて支援するため、糖尿病内分泌疾患支援チーム(DiaEndoMAT)として独自の活動も行った。能登地区に居住し附属病院内分泌・代謝内科通院中の約300名の方の安否確認を行い、必要に応じて薬剤処方した。また、被災住民への療養情報として、LINE、X、ホームページを使って広報SNSを立ち上げた。また、避難所に掲示できる住民向けポスターを作成し、配布した。さらに、被災時糖尿病管理マニュアル、内分泌疾患の管理マニュアルを作成し、被災地で活動する医療支援チームに提供した。

以上、能登半島地震における糖尿病医療支援チームの活動につき紹介させていただいたが、DiaMATは今まで活動実績が無く、JMATとしての派遣実績も無

かったため、その調整は困難を極めた。通常のJMAT活動以外で臓器別チームとして派遣されたのは、DiaMATの他は、循環器内科の高村雅之教授、保健学系の森下英理子教授を中心とした深部静脈血栓症予防チーム、眼科チームだけであり、DiaMATの活動は他の臓器別チームと同様、一定の意義はあったのではないかと思考している。最後に、日本医師会から派遣されJMAT調整本部で中心となって活動された秋富慎司先生には、本当にお忙しい中DiaMATの活動にご尽力いただき、多大なご迷惑をおかけした(写真2)。また、DMAT調整本部で活動されていた小見

巨先生(平成8年卒業)には、DiaMATの輪島地区への派遣に関しご尽力いただいた。秋富先生、小見先生をはじめ、糖尿病医療支援チームの活動をサポートしていただいた全ての方に感謝の意を表し本稿を終えたい。



写真2 石川県庁内JMAT調整本部にて、秋富慎司先生(写真中央)、東京都JMATとして派遣された山村卓也先生(写真左、令和3年卒業)と古川(写真右)

JMAT「深部静脈血栓症(DVT)検診」班の活動報告

金沢大学医薬保健研究域病態検査学 森下英理子

去る1月1日におきた能登半島沖地震にてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。同窓会会員の皆さまの中にも、被災された先生方がいらっしゃるかと存じますが、改めてお見舞い申し上げますとともに、被災現場での医療活動にご奮闘されている先生方に、深く感謝申し上げます。

さてこの度は、金沢大学附属病院から日本医師会災害医療チーム(JMAT)「深部静脈血栓症(DVT)検診」班として、被

災地支援に参加する機会を得ましたので、活動状況についてご報告をさせていただきます。

本邦では2004年の新潟中越地震において、車中泊を原因とする急性肺塞栓症(PE)が多発し、エコノミークラス症候群という疾患名が国民に周知されるようになりました。さらに、2016年熊本地震では本震2日後に車中泊の50歳代の女性がPEにより死亡したことより、車中泊への注意についての啓発がマスコミ報道を通じて行われました。そこで、今

回の能登半島地震の発生に際し、車中泊者を含む避難所での生活を強いられている被災者の方々の静脈血栓塞栓症(VTE)を予防するために、医師、臨床検査技師、看護師によるDVT検診+心のケア+フレイル予防チームを結成し、石川JMATの災害医療チームとして支援活動を行いました。活動の主な目的は3つ、①早期にDVTを発見し重症VTE発症を防ぐ、②血栓発症リスクの高い被災者に弾性ストッキングを配布し、着脱の指導を行う、③下肢の運動、脱水予防などの

令和6年能登半島地震 | 緊急特集 |



血栓症予防啓発を行う、であります。と同時に、私達は「同じ石川県民として一人一人の避難者の方々に寄り添いながら話をじっくり聞く」ということを最も心がけました。

派遣医療チームおよび活動の概要を、以下に示します。

派遣先：JMAT能登中部調整支部・能登中部保健福祉センターと連携し、志賀地区ならびに富来地区の12カ所の避難所を巡回。

派遣期間：1月28日から3月25日まで、1週間に1回程度合計9回、日帰りで活動を実施。

派遣構成員：医師3名(循環器内科医1名、血液内科医2名)、附属病院検査部より検査技師5名(エコー検査3名、採血2名)、保健学科より検査技師4名(採血あるいは調整係)、看護師2名(心のケアあるいはフレイル対策)、事務官4名(運転あるいは調整係)、博士課程大学院生1名、合計19名が参加。1チームは、医師1名、エコー検査技師1名、採血ならびに調整係2~3名、運転士1名、計5~6名で構成され、心のケア支援あるいはフレイル予防を行う看護師が加わることもありました。

活動内容：問診により、年齢、肥満度、妊娠、基礎疾患(高血圧、高脂血症、糖尿病、悪性腫瘍など)、車中泊の有無と期間、内服薬、特に抗血栓薬、女性ホルモン剤、睡眠薬の使用状況、水分摂取状況、生活

パターン(寝たきりになっていないか)、弾性ストッキング着用の有無、血栓症の既往について、また症状として下肢の浮腫、腫脹・疼痛や色調変化、歩行時の下肢の違和感、労作時の息切れや動悸が強くなってきたか、などを聴取しました。さらに診察にて下肢の腫脹、色調変化、下腿筋の圧痛、下肢静脈瘤、など

の所見をチェックしました。

次に、希望者全例ならびに問診によりVTEの危険因子が2つ以上ある場合は、下肢静脈エコーによるDVT検索、および採血にてD-ダイマーのチェックを行いました。新鮮なDVTを認めD-ダイマー値が $2.0 \mu\text{g/mL}$ 以上の場合は、恵寿病院、富来病院、羽咋病院などに紹介状を作成し、PEを含む全身検索を依頼する形をとりました。しかし実際には、かかりつけ医院に紹介してほしいと懇願される場合もあり、PE合併の有無までは確認できない方も数名おりました。

活動状況：9回の派遣活動で、12カ所の避難所を巡回し、問診者数はのべ174人、下肢静脈エコー検査実施者124人、D-ダイマー測定者140人でした。エコー検査にて新鮮血栓が124人中15人(12%)で認められ、新鮮血栓陽性者は初回が23%と最も多く、その後減少し2月中旬にゼロとなったのですが、3月後半か

らじわりと増加しはじめ、3月下旬には17%となりました。新鮮血栓を認めD-ダイマー高値の避難者は、基幹病院あるいはかかりつけ医に紹介しましたが、幸いなことに重症PEを発症し入院が必要となった方はいませんでした。ほとんどの方が経口抗凝固薬の内服を開始され、3月に再び巡回し再検査できた方は、全員エコー検査でDVTが縮小しD-ダイマー値もほぼ正常値まで回復しておりました。

志賀町の避難所では、各県から派遣されているJMAT、JRAT、保健師さん達がほぼ毎日入れ替わりで巡回しており、DVT予防の啓発活動が積極的に行われています。車中泊避難者の方々は、DVT予防の注意事項を忠実に守っており、車内では足を延ばし日中は動くことを心がけていましたし、避難所の高齢者はなかなか弾性ストッキングが一人で履けないので、水分摂取に努め足の屈伸運動をまめに実施していました。こういったJMAT、JRAT、保健師さん達の日々の啓発活動が功を奏し、致死的なPE発症を事前に防いでいるのではないかと考えています。私どものDVT検診も、血栓症を検出することが目的ではなく、エコー検査を行いD-ダイマーの値をお知らせすることそのものが、啓発活動の一環であると考えます。

最後になりましたが、エコー検査機器を貸与していただきました日本超音波医学会、D-ダイマーの簡易迅速検査(POCT)機器を貸与していただきましたシスメックス株式会社に深謝いたします。また、ご協力をいただきました多くの医療関係者の皆さまに心より感謝申し上げますとともに、一日も早い復旧、復興がなされるようお祈り申し上げます。



義援金を送ろうか 4450会

(昭和44年入学あるいは昭和50年度卒業)

今回の能登地震で、同級生の珠洲で開業している四十住伸一君と輪島で開業している船木芳則君が被災しました。同級生の山嶋哲盛君から何か援助してはどうだろうかと話があり、そこで北山吉明君が金沢から輪島まで片道4時間かけて状況を見に行ってくれました。その結果、被災した両君に義援金を送ろうかということになり、同級生に手紙を出したところ、なんと60名から義援金の振り込みがあり、総額350万円になりました。びっくりです。我々の仲間は卒業後すでに50年近く経っているのに!!入学時は110名でしたが、亡くなった仲間も20名いるので、現在、90名くらいになりますが、その3分の2の同級生から義援金が集まったのです。ありがたいです。医者仲間の絆は強いですね。

また、金沢、富山でも被害を受けた方がおられるのですが、その方々からも振り込みがあり申し訳ない気持ちでいっぱいです。

(カメイクリニック2 亀井 康二:記)

みんなから寄せられた声です

●いろいろ手配方お疲れ様です。

支援金 振り込みましたのでご確認ください。船木先生、四十住先生の再起を祈念しています。

●今回の能登地震被災者の皆さまには、

心からお見舞い申し上げます。遙か離れた南の島から少額ですが、義援金も振り込ませていただきました。

沖縄から

●宮崎の〇〇です。

本日振り込みました。

船木先生とは輪島市民病院で1年近く一緒に働きました。四十住先生にも何かとお世話になりました。お二人とも、頑張っって再起していただきたい。

●富山市 〇〇です。

四十住君、船木君の近況有難う。先日、四十住君に携帯電話で連絡しました。四十住君が元気な声で話したので、無事でよかったと思い、私は思わず涙声になってしまいました。そんなんで船木君にはまだ電話していません。涙声になるのでやめときます。再開した時

には無事を喜びます。

●ご苦労様です。

昨日銀行に振り込みました。どうにか仕事をしています。

●今日船木君と電話でいろいろ話しました。なんとか元気を振るっているようでした。そろそろ店じまいかともらしていました。もうすこし待ってみたらと申しましたが周りの状況は厳しいようでした。火事の現場からは500mしか離れておらず、近所の家々は倒壊しているようで、人口も減少を免れないようでした。

●お知らせ有難うございました。

同級生の誰かが被災していなければと心配しておりました。お二人ともお元気の様でなによりです。

北山先生、交通事情の良くない中、現地まで行かれたようで感謝です。よろしくお伝えください。

些少ですが昨日早速振り込ませていただきましたので、よろしく願い致します。何かありましたら、またご連絡ください。

●船木君は剣道部でのお付き合い、四十住君は脳外科でのお付き合いで、アホな私はこの二人のおかげで、なんとか医学部を卒業し医者を続けることができました。

心情的には、一人で、100万円くらい寄付したいのですが、そんなに稼ぎはないので、今日の昼休みにとりあえず亀井君の口座に振り込みます。

100万円だと、一人に50万円しか行かないので、「獅子の会」の名に恥じぬよう、せめて、200万円を目標としましょう。

同級生のみなさん、奥能登は大変なことになっています。

みんなを助けることはできないけど、せめて、昔、机を並べた学友は助けようじゃありませんか?!

亀井君と北山君には本当に感謝!の気持ちでいっぱいです。

私の住所等を記します。同級生の皆さん、ぜひ、お元気で。

私も近いうち、輪島と珠洲に直接出向いて、二人を励ましてくるつもりです。

●敦賀医師会は奥能登医師会に義援金を

令和6年能登半島地震 | 緊急特集 |

送りました。日本医師会、県医師会からの呼びかけはあったのですが、何処へ行くか分からないので直接関係の医師会に送ることにしました。中越地震の時もそうしました。振り込めて良かったです。珠洲は家内の実家があるのです。

●ご苦労様です。

この歳になり、災害で生活を潰されてしまったことを思うと、何とも言えません。この度、貴君から四十住、船木君へのカンパの連絡をいただき、贈らせていただきます。

この歳で、こんな状況になってしまうこと、復興のエネルギーも大変で、力を失ってしまうことも理解いたします。とにかく、復興、災害資材の除去と、整備が進まなければ、復興も難しいと思います。一日も早く、日常を取り戻すことを願っています。

わずかですが、静岡からがんばれとエールを送っていることをお伝えください。

復興にはほど遠い金額でしょうが、同級生の応援があるよ、がんばろうねという気持ちが伝われば幸いです。

この歳を考えると、負担は多いと思いますが、静岡からがんばれのエールを送っていることを、お伝えください。

●そうですか、閉院せざるを得ませんか。震災さえ無ければ、まだまだ活躍できたのに残念だし悔しいですね。来週には指定口座にカンパさせてもらいます。

●お久しぶりです

私も今回の地震による被害には心を痛めていましたが、亀井先生のように行動できたことに敬意を表します。

昨日、入金させていただきました。何

らかのお役に立てれば幸甚です。

困ったときはお互いに助け合いができればと思いますので、また何かお手伝いできることがありましたらおっしゃってください。

●遅れましたが、今日義援金を送金しました。少額ですがよろしくお願ひします。ところで、当方は65歳で定年退職してから不規則のアルバイト医師をしておりました。昨年4月からは老健施設での非常勤勤務、月曜日と火曜日の2日だけの勤務になりました。時間を持て余しておりますが、ゆっくりと老後を過ごしております。

●同級会世話人幹事としてのお役目ご苦労様です。四十住、船木両先生の他に被災された先生はいないのでしょうか。内灘町の液化化現象もかなりひどいようです。本日、気持ちだけですが振り込みました。よろしくお願ひします。

●大変ご無沙汰致しております。

なんと、年明け早々の「令和6年能登半島地震」では、トンでもない事とビックリしておりました。

福井に居た小生の家内の年老いた母親が数年前から金沢の伊藤医院にお世話になっておまして、即座に金沢に連絡し、家の中は色々な家財道具もひっくり返ってエライ目に遭ったということを知ったものの、バーさんを含めて家族は皆さん無事ということで一応の安堵はしておりました。

小生は、ずっと以前より静岡県医師会にて「災害時医療コーディネーター」をしております。…すでに、後期高齢者となった今でも、なり手が居ないため、交代して貰えない！…

日医の「JMAT」にも登録してあったた

め、日医にて地域を決めて(静岡県は穴水市になった)県医師会で派遣チームを決めたのですが、流石に“後期高齢者”では、モタモタ現地に行って、“ご迷惑”になり兼ねない(!?)と、小生はお役御免になった!!!

小生は、出向で7年間も七尾市の恵寿病院におりました。病院前の社宅で暮らし、ほとんど日夜病院暮らしでしたので、そこを辞めてコッチに来てほぼ40年になるのですが、今では能登半島での知り合いは全然おりません。

しかし、3人の娘たちは幼稚園と小学生でしたので、家内にはその関係で現在でも七尾市や能登半島に沢山の知り合いが居るのに、なかなか連絡も取れず、やきもきしていたようです。

そんな事から報道で知り、お世話になった七尾市役所に早速義援金を送ったようです。七尾市の担当職員からお礼の電話があったと言っていましたので、相当送ったのでしょうか!?

小生の方は、亀井君や加藤君、山嶋君のメールにて、状況を確認させていただいておりましたので、甚大な被害は兎も角、身体的にはご無事で何よりと安堵させていただいておりました。

機会が有ったら、皆さんを元気づけて上げてください!

ではまた、ヨロシク!

●今回の義援金の計画、ご苦労様です。少ないですが貴君の指定口座に送金いたしました。

輪島市に開業しているクリニックは壊滅的で、患者数は激減状態とのことでした。今後は二人とも70代となり、今後に廃業も選択肢の一つと言っていました。四十住先生のことは情報なく気になっていました。

以上、よろしくお願ひします。

- こんにちは、お久しぶりです。お手紙届き、四十住さんと船木さんの被災と閉院の状況を知って、先程振り込んで来ました。
同級生として早速行動して下さった亀井先生、北山先生に感謝いたします。取りまとめて届けるのもお手数と思いますが、よろしく願いいたします。同級生の皆さまにはよろしくお伝えください。
- 能登半島地震が起きた時、すぐに現地で働いている同級生はどうしてるのか心配しましたが、具体的な行動を取ることができず、やきもきしてました。四十住君、船木君が被害にあい、開業を止めざるをえなくなったと知り、誠にお気の毒としか言いようがありません。些少ではありますが、本日貴君宛に送金させていただきました。頑張るようにお伝えください。よろしく願います。
- 細川君 柴崎君 澤田君が、リタイアしました。
こちらは、良い後継者が見つかるまで現役続行予定です。明日振り込みます。世話をかけますが、よろしく願います。明日は我が身我が身と思っています。
- 本日、振り込んだよーみんな、年いって、大変だ。
- ご無沙汰しています。お手紙受け取りました。ご連絡ありがとうございます。四十住君のことは、心配していた所です。電話をしてみました、通じませんでした。本日、お見舞いを振り込みましたので、ご確認ください。僕の方も、昨年春に身体を壊して今、

閉院の準備をしているところです。
お元気で、ご活躍してください。

- 色々とお配りをしてくれてありがとうございます。
義援金の振り込み手続きをしました。明日口座に振り込みがあると思います。
- 連絡いただきありがとうございます。
早速、振り込みました。
- ご苦労様です。
輪島市、珠洲市、思っていた以上に被害が大きいことを改めて認識しました。本日、僅かですが 振り込みさせていただきました。
- お世話役ありがとうございます。些少ですが振り込みました。
よろしく願い致します。
- 義援金のお声がけ多謝です。些少ですが、振り込ませていただきました。
フレーフレー四十住！
フレーフレー船木！
北山くんにもよろしくお伝えいただければ幸いです。
- 亀井君、北山君には今回のことで大変お世話になっています。
両君の健康を祈るしか出来ませんが、四十住君、船木君への義援金を本日振り込みました。
取り敢えず報告します。今後ともよろしく願います。
- お知らせいただきありがとうございます。義援金、少額ながら振り込ませていただきました。
お二人は閉院せざるを得ない状況なので、頑張って地域に貢献されて来

ただけに、お辛いでしょね。
せめてお身体はご健勝で、今後もお過ごしされることを願うばかりです。
四十住、船木両先生によろしくお伝えください。

- 本日振り込みました。
今後も支援していきましょう。
- お疲れ様です。
ご指定の口座に心ばかりの義援金を振り込みました。ご笑納ください。
- いつも大変お世話になりありがとうございます。
本日、四十住くんと船木くんへの義援金を振り込みさせていただきました。
いろいろお世話をおかけしていますが、ありがとうございます。
これからも、よろしく願いいたします。
四十住くんと船木くんへも、くれぐれも体に気を付けるようにお伝えください。
- 亀井先生、北山先生
ご苦労さまでした。
閉院は寂しいけれど、仕方ないですね。(私も亀井君のように、体が続く限りクリニックを続けたいと思っています。)
振り返ると、私たちは良い時代を生きてきましたね。これからの国民皆保険による医療はどうなるかわかりません。厚労省の役人により、私たち医師が右往左往するのも悔しいです。
私の息子も整形外科医になりましたが、クリニックを継承させるか否か迷っています。早速、義援金を送らせていただきます。
よろしく願います。
- もうすぐ退職ですが、半日仕事で元気になっています。

卒業生に贈る言葉



前医学部長、金沢大学名誉教授
杉山 和久

卒業生の皆さん、金沢大学医学類のご卒業、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。これから研修医としての新しい生活がスタートします。今までの医学生としての勉強は医師になるための準備であり、これからが医師としての実地の勉強です。卒業生全員が同じスタート台に立ったと言えます。 「継続は力なり」という言葉があります。何事も諦めずに続けることが重要で、自分の人生をかけたライフワークとなる仕事が残せたら素晴らしいことです。

私は1984年に金沢大学医学部医学科を卒業しました。皆さんの先輩として、自分の経験から、皆さんが今後どのように勉強したらよいか、私の最後の贈る言葉を述べたいと思います。

自分の実体験から卒業生に贈る最後の言葉

最初の10年が重要である

学生時代に、「最初の10年は大事だから死にものぐるいで頑張れ」とある内科の教官に言われました。また、入局した眼科学教室の医局長からは、「最初の6年で一生の臨床力が決まる」とも言われました。これは本当だと実感しています。若い時に実地臨床の基礎力を身につければ、後はそれに上乗せで行けます。それには人の嫌がることを進んですることで。私は急患手術にはできる限り参加するようにしました。手術日は外回りでも何でもいいので、とにかく手術室で手術を見ながら雑用をしました。入院患者も進んで受け持ち、主治医として最高10名は持ちましたが、へとへとでした。

同僚、先輩、後輩の症例でも勉強する

これは私のオーベンの先生から教わりました。また、旧第2内科教授であった竹田名誉教授も講義の時に述べられました。自分1人の経験できる症例は限られています。人にはいい方法があります。当直の時や、時間の空いた時に、病棟の全症例のカルテを読み込むのです。眼科病棟には40人の患者さんがいましたので、週1回は全員のカルテを読みました。すると治療経過、検査所見など、診断から治療、管理まで手に取るようにわかりますし、週1回の教授回診が楽しくなりました。

英会話の勉強は大切、留学につなげる

私は学生時代に金大城内キャンパスのESS(English Speaking Society)に所属したものの、途中で挫折して、英会話は苦手でした。ところが、入局した眼科の教授は日系米国人かと思うほど英語が堪能で、舌を巻きました。それに奮起して英会話を一生懸命勉強して、米国オレゴン州ポートランドに留学しました。世界の人々とコミュニケーションをとるのは楽しいですし、若いうちから英会話を勉強して、世界に羽ばたいて欲しいと思います。

師との出会いは人生を変える

私の人生を一変させたのは、一生の師と仰ぐ眼科教授との出会いでした。15年間にわたり師事して緑内障を学び、自分のライフワークとしました。眼科研修医2年目で出会い、人生の目標、研究の面白さ、生きる上での指針を与えられた気がします。皆さんはこれからさまざまな職場で働くこととなりますが、自ら尊敬できる師となるべき先生を求めて欲しいと思います。

最後になりますが、私の所属する眼科学教室の前任の教授であり、元金沢大学附属病院長でもあった河崎一夫名誉教授の言葉を卒業生の皆さまに贈りたいと思います。師曰く、「心の真の平安をもたらすのは、富でも名声でも地位でもなく、人のため世のために役立つ何かを成し遂げたと思える時なのだ」。これを目指して頑張って、一流の医師になってください。

就任挨拶



谷内江昭宏 博士

(昭和54年卒業)

金沢大学の新しい未来と 能登の創造的復興のために

令和6年4月1日付けで、附属病院・同窓会・大学基金担当理事・副学長に任命されました。同時に、新しく設立された能登里山里海未来創造センターのセンター長にも就任しました。任期中はこれらの業務を中心に、和田学長の理念である“志”の下に研究に強い、世界に発信する大学を作るべく金沢大学の新しい未来のために誠心誠意力を尽くしたいと希望しています。十全同窓会の皆さまにはこれまで同様、暖かい励ましとご指導を賜りますようお願いいたします。

私は令和元年に金沢大学医薬保健研究域医学系小児科主任教授を定年退職。その後5年間、それまで兼任していました医療安全管理部長職を専従として継続しました。医療安全管理部長としての10年間、複数の大学病院での相次ぐ重大な医療事故を受けて、特定機能病院における医療安全のあり方について大きな変革がなされました。これに対応し病院臨床倫理委員会の設立、倫理コンサルティン

金沢大学理事に就任

グチームの結成、高難度新規医療技術等管理部門の設置など院内体制を整備することに追われ、あっという間に時間が過ぎていきました。さらに、2020年の新型コロナウイルスパンデミックの発生では、大学病院としての重症患者受け入れ対応、COVSATの結成に関わり、石川県医療調整本部では県内医療機関の入院調整、検査機能の強化、クラスター対策のための司令塔機能の整備が課題となりました。

今年1月1日に発生した能登半島地震では、総合大学としての金沢大学の役割が問われました。金沢大学としては、発災直後のDMAT派遣やDMAT受け入れ拠点の設置、JMATの能登地域1次避難所への派遣などの医療支援が開始されました。さらに、こころのケア専門チーム「KEYPAT」が立ち上げられ、被災された方々を心理面からサポートする取り組みが始まりました。また、被災中学生・高校生の教育支援、ボランティアによる被災地支援などの多角的な支援活動も進められています。KUDは文理医融合の合同研究チームとして早期より被災地に入り、現状把握を行うと同時に、復興対策に役立つ情報発信を続けています。

このように今できる支援について総力を結集すると同時に、10年後、20年後を見据えた、次世代を担う若者・子供たちのために中長期的な復興の姿を学術的に構築して提案することが、被災地にある大学の大きな責任となります。そのような金沢大学としての関わりを統括する目的で、1月末に能登里山里海未来創造センターの設置が決まりました。これは、金沢大学が被災地である能登半島や石川県だけでなく、災害多発国であり少子高

齢化の国である日本の今後を見据え、半島防災と新しい過疎地の未来について、世界にも視野を向けて発信するための研究拠点となることを明らかにしたものです。

新年度からは、いよいよ医師の働き方改革に対応するさまざまな取り組みが注目を浴びることになります。最後の砦としての高度先進医療の実践のみでなく、質の高い教育・研究を行うことが求められているのが附属病院です。それぞれの仕事の質を低下させることなく、限られたエフォートをどのように配分するかについて、タスクシフトやDXの導入、多職種連携の強化など多様な、そして新しい取り組みが行われる必要があります。

十全同窓会をはじめ、金沢大学同窓会組織はこのような金沢大学のさまざまな取り組みを支え、その方向性を示す羅針盤のような役割を果たしてくださると思っています。金沢大学は現在ここに学ぶ学生や働く職員・教員・研究者、キャンパスに立ちならぶ建物、研究室だけで成り立つものではありません。長い歴史と伝統が金沢大学を形作っています。同窓会の皆さまの熱い思いが金沢大学の活力を支えています。それは寄せられる多くの寄付にも反映されていると思います。ここに学び、研究する若い人々の輝かしい未来のために尊い寄附が活かされるよう、同窓会・大学基金担当としても工夫と努力を重ねたいと考えています。

理事としての仕事に戸惑うことも多い毎日ですが、できる限りの力を尽くして金沢大学に貢献する所存です。どうぞよろしく申し上げます。

就任挨拶



絹谷 清剛 博士

(昭和61年卒業)

系・域を超えて
研究力強化へ

このたび、令和6年4月1日付けで、和田隆志学長から副学長(研究力強化、大学基金、同窓会)の指名をいただきました。前年度まで医薬保健学総合研究科長を2年間務めさせていただきましたが、任期初年度に大きな外傷を受けたため長期間十分に活動できない状態になってしまい、大学、関連学会、そして十全同窓会の皆さまにご迷惑をおかけすることになってしまいました。この間、多くの方々にご助けていただきましたことを、この場をお借りし御礼申し上げます。

私に与えられた用務の第一は、上記のごとく研究力強化です。大学全体に関わるものですが、十全同窓会会報の記事ですので、宝町に関わることとして記載させていただきます。

医学系の皆さんは総じて感じておられるかもしれませんが、近年、研究における医学系の力が弱くなっているようです。脳科学、消化器科学、循環器科学等々で、大型予算を獲得され、当該分野を牽引する成果を上げておられる教員が少なから

金沢大学副学長に就任

ずおられることは事実です。一方で、医学系全体として見ると、研究費獲得、成果発信とも、低下しているようです。少数の突出した研究があればよいではないかという考えもあるかもしれませんが、大きなテーマに到達するには、そこに至る経験が必須です。通常勤務に忙しく、働き方改革を実践しなければならない時代では、研究にまで時間を割くことはできないよ、とおっしゃる方もおられるでしょう。しかし、若い頃から思考する経験がなければ、大きな構想を練ることはできないでしょう。大学に在籍する方も、診療施設に在籍する方も、若者たちと議論する時間を持っていただきたいと思えます。

さて、本年度より、“地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)”という文部科学省の事業が始まりました。本学は北陸先端科学技術大学院大学との連携による提案大学として、全国の12大学として選出されました。研究力の発展、研究大学群の形成、研究活動の国際展開、社会実装の加速・レベルアップの実現、などがキーワードで、本学として考える戦略は、①国際頭脳循環や研究支援体制の充実による国際化の加速、②確信的な融合研究の創出と卓越領域拡充機能の強化、としています。10年後には、「世界トップレベル研究拠点プログラム」(WPI)への結実を目指しています。そのためには、各講座の単独活動ではなく、系・域を超えて、文理医融合として大学が一体となったテーマでの活動が必須です。皆さんが本挨拶文をご覧になられるタイミングにおいて、その方向性決定の議論が山場を迎えていることと考えます。文理医融合での取り組みですので、全ての講座の研究を何らかの形で紐付けるこ

とが可能でしょう。自分には関係のないことであるとせず、この事業をきっかけとして、自身の分野で新たな仕掛けづくりもできるであろうとお考えください。

地域中核・特色ある
研究大学強化促進事業
(J-PEAKS)



同窓会担当に関しては、全学での用務内容について十分に説明していただけない段階ですので、ここでは十全同窓会に限って記載させていただきます。皆さんご存じのごとく、近年、新規卒業生の方々の同窓会加入が著しく悪化しています。昨今の若者がよく口にする、“どんなメリットがあるんですか?”というのが理由の一つのようです。失礼を承知で敢えて書かせていただくと、多くの学生が、母校を国家試験対策予備校としてとらえているのではなからうかと感じます。一方で、古い卒業生の立場として考えると、若い人たちを引きつける試みを長年してこなかった同窓会側に原因があるとも感じます。短期間で変革することは困難ではあるものの、これを思考する時期に来ているのは間違いありません。私は2014年より、同窓会会報編集委員長の任に就いていましたが、現在はその任から降り、本年中頃から同窓会の別用務の任に就くこととして指示をいただいています。同窓会会報は、編集委員の方々のお力で、体裁を大きく変更することができました。同窓会のあり方そのものも、学生の声を含めた若い方々の発想で変革すべき段階にあると考えます。

十全同窓会の皆さまのお力を拝借することが、これまで以上に多々あるかと存じます。皆さまのご支援を頂戴できますよう、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。



堀 修 博士

(特別会員)

臨床のニーズ・シーズと 基礎研究を連動させ、 研究の好循環を目指す

医学系神経解剖学の堀でございます。これまで大学院医薬保健学総合研究科長を6年間、医薬保健研究域長・学域長を2年間務めさせていただきました。この度、さらに2年間、医薬保健研究域長・学域長を務めさせていただくこととなり、大変光栄に存じますとともに、改めて身の引き締まる思いであります。この場をお借りして、今後の医薬保健研究域・学域の方向性などについて述べさせていただきます。

まず、研究面については、和田学長の下、人生100歳時代におけるwell-being実現に向け、基礎・臨床融合研究、異分野融合研究、実証研究を推進してまいります。域内研究センターである「AI

金沢大学医薬保健研究域長・学域長に再任

ホスピタル・マクロシグナルダイナミクス研究開発センター」および「サピエンス進化医学研究センター」の強化に加え、特に附属病院との連携により、臨床のニーズ・シーズを基礎研究へ、また、基礎研究の成果をイノベーションにつなげる、研究の好循環構築を目指しております。昨年度に2回行いました附属病院、医薬保健研究域、理工研究域の合同シンポジウムは、互いを知り合う良い機会となり、今後、この循環を加速化するための重要な場になるのではないかと期待しております。ぜひ、他の研究域、センターも巻き込む形で、発展させていきたいと考えております。

教育面については、新たに設置された「医療人材教育研究センター」を核とし、高度専門医療人材育成に向けた学域、附属病院、研究科の連携強化、コア・カリキュラムのみにとらわれない新たな融合的教育の推進を目指してまいります。例えば医学類におけるメディカルリサーチトレーニング(MRT)プログラムでは、学士課程における継続的な研究活動を選択科目として認定し、個々の学生のレベルに合わせた多様な教育を可能にしています。今後もこのような取り組みを発展させ、他の分野にも広げていきたいと考えております。また、2021年に設置された医薬科学類においては、今年度、初めて卒業生を送り出す予定です。同学類では、広い視野と高い研究実践力をもつ医学・薬学研究者を育成する為、早期からラボローテーションおよび研究室配属

を実施しております。今後、MRTとも協働し、学士課程から大学院にシームレスにつながる融合的教育を目指してまいります。

国際交流については、コロナ禍で培ったオンライン交流も活用し、これまで以上に積極的に展開していきたいと考えております。昨年度、本学が採択された文科省事業「大学の世界展開力強化事業」では米国の主要大学との間で、所謂COIL型教育(オンラインを活用した国際的な双方向の教育)を推進する予定です。対面での学生交流とオンライン交流をうまく使い分けることにより、より効果的な教育効果が得られると考えております。

最後になりましたが、本年1月1日に発生いたしました能登半島地震におきましては、多くの方が被災されました。被災されたすべての方に心からお見舞い申し上げます。医薬保健研究域・学域といたしましては、大学に設置された「能登里山里海未来創造センター」の下で、附属病院とも協力し、能登の方々に寄り添い、能登の医療、疾患予防、健康増進に貢献する取り組みを行っていききたいと考えております。

私はこれまで、特に部局内外の連携、迅速な情報共有を意識して業務にあたらせていただきました。今後も人のつながりを大切にし、医薬保健研究域長・学域長の業務に精一杯取り組ませていただきたいと思います。十全同窓会の諸先生方におかれましては、何とぞご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

就任挨拶



田嶋 敦 博士

(特別会員)

研究成果を教育に還元し
予防医学教育の高度化に
つなげたい

令和6年4月1日付で、大学院先進予防医学研究科長に再任いただきました。ご存じのように、金沢大学、千葉大学、長崎大学により編成される先進予防医学共同専攻(医学博士課程)をもつ大学院として設置されました本研究科は、平成28年4月の開設から8年が経過いたしました。3期目の2年間を務めさせていただきますことになりましたが、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という本学の基本理念や、本学のビジョン、

金沢大学大学院先進予防医学研究科長に再任

構想、方向性に沿った研究科運営を行っていく所存です。とりわけ、昨年度採択されました「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」や、令和6年能登半島地震後に設置されました能登里山里海未来創造センターの活動等、本学独自の取り組みに対してこれまで以上に積極的に関わるよう努めてまいります。

研究科の研究面では、本学の先進予防医学研究センターを中心に行われてきました予防法確立のための基礎的研究や、個別化予防を実践するための研究を引き続き重視し、さらに発展させるとともに、国際的な異分野融合研究を一層推進し、先進予防医学にかかる特色ある研究拠点の形成を目指します。また、新たな重点領域として、研究成果の社会実装や産業展開にかかる研究に注力いたします。医薬保健研究域・学域、医薬保健学総合研究科、附属病院等と連携して、研究成果の社会実装・産業展開に向けた産官学金連携の強化を図るとともに、先進予防医学にかかる寄附講座や共同研究講座を多角的に設置・運営することを目指していきたいと思っております。得られた研究成果は、研究科における大学院教育に還元し、予防医学教育の一層の充実と高度化につなげていきます。

教育面では、各構成大学の特長を活か

した3大学共同教育課程のさらなる質的向上を図り、0次予防から3次予防までを包括した個別化予防を実践できる優れた人材の育成・輩出を継続して行ってまいります。また、構成3大学による修了生ネットワークを構築し、先進予防医学にかかる人材の確保や、課程修了後のキャリアパス等への活用を図っていききたいと思います。学内においては、医薬保健総合研究科と協同し、複数の医学博士二重学位取得プログラムを設置し、多様な人材を確保するとともに、国際的な視野を持つグローバル人材・予防医学研究人材の育成を目指します。また、国費外国人留学生優先配置特別プログラム等を活用し外国人留学生を積極的に受け入れ、課程修了後、母国と日本との懸け橋となって個別化予防を推進できる人材の育成に努めます。加えて、本学の博士研究人材支援・研究力強化戦略プロジェクト〈ハカセプラス〉等の活動を通じて、異分野横断型の融合教育による先導的な博士人材の輩出にも貢献していきたいと思っております。

十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。





河崎 洋志 博士

(特別会員)

金沢大学の研究力強化に貢献

十全同窓会の皆さまにおかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より大変お世話になり改めて深く感謝申し上げます。1月の能登半島地震ではご親族や診療などに多大な被害や影響を受けられた先生方も多くいらっしゃるかと存じます。衷心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早く平穏な日々が戻りますことを心よりお祈り申し上げます。

2024年4月より大学院医薬保健学総合研究科の研究科長を拝命致しましたので一言ご挨拶申し上げます。私は卒業後4年間、脳神経内科で臨床研修をさせていただき、その後は脳神経系の基礎研究を行ってまいりました。2013年に教授を拝命して以来、2014年度から4年間は医学系の副系長(学生支援担当)、2018年度から6年間は副系長(研究担当)を、また2022年度から2年間は学長補佐(研究力強化担当)を務めさせていただきました。これらの経験を生かし医薬保健学総合研究科の発展に貢献させてい

金沢大学医薬保健学総合研究科長に就任

ただきたいと存じます。

和田隆志学長の金沢大学未来ビジョン「志」の柱の一つが「独創的な世界トップレベルの研究展開による世界的研究拠点の形成」です。私は医薬保健学総合研究科の発展こそが金沢大学の研究力強化に不可欠と考えております。医薬保健学総合研究科では臨床医学系、基礎医学系、薬学系および保健学系が協力して、医学の諸問題に対して様々な角度から世界最先端の研究が行われています。今後さらに研究力を強化するためには個々の教室の発展はもちろんのこと、教室や研究域の枠組みを越えた異分野融合研究の促進、産官学金および地域の連携強化、研究成果の社会還元による地域社会の健康増進と医療向上への貢献が重要になると思います。これらを促進するために研究技術の支援体制の確立、最先端研究機器など研究環境の整備、大型研究費の獲得などを医薬保健学総合研究科として支援してまいりたいと考えております。

研究や開発には多くの失敗を乗り越える必要があり、また成果が出るまでには時間もかかります。しかしそれらを乗り越えて、自分の力で何かを発見できたときの喜びは代えがたいものがあります。また私が大学院生時代に国際学会でポスター発表をさせていただいた際のことですが、メキシコの研究者がポスターを見に来てくれて「論文の内容は面白かった」と言ってくれました。論文を通じて世界各地の研究者とつながっていることがとてもうれしかったことを憶えております。研究の面白さ、すなわちワクワクする気持ちを知ることにより、研究に対する姿勢が変わり積極的になった若手研究者や大学院生をこれまでに多く見てきまし

た。ぜひ若い皆さんには研究の面白さを知っていただければと思います。

金沢大学では「国立大学改革・研究基盤強化推進補助金」や「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」などに次々に採択され、研究力強化に向けて勢いが出てきています。超然プロジェクトや先魁プロジェクトなどの学内の大型グラントも利用することができます。異分野融合研究を推進するために医薬保健研究域にはサピエンス進化医学研究センターが新設され、また研究成果を社会実装やスタートアップ企業創出につなげるために未来知実証センターが設立されました。さらに社会実装が近くなれば、金沢大学全額出資のベンチャーキャピタル「ビジョンインキュベイト」を利用することもできます。大学院生には「金沢大学博士研究人材支援・研究力強化戦略プロジェクト」で給付型奨学金の手厚い経済的支援が行われており、外国人留学生に対しても「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」による経済的支援があります。このような金沢大学の素晴らしい研究環境をぜひ生かしていきたいと考えております。

医薬保健学総合研究科は金沢大学の中心部局の一つとして、金沢大学の研究力強化に貢献することが期待されており、そのためには十全同窓会の皆さまのご支援が不可欠です。医薬保健学総合研究科の発展のために、皆さまのご指導とご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げますとともに、十全同窓会の皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

就任挨拶



山本 靖彦 博士

(平成4年卒業)

輝く金沢大学医学系・医学類の
未来を見据えて

令和6年4月1日付で、医学系長・医学類長を拝命致しました山本靖彦でございます。まずは、令和6年1月1日に発生しました能登半島地震により犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表し、被災者ならびに関係の皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。医学系・医学類におきましても、被災地である石川県にありますが金沢大学の中心的存在として、震災後の復旧復興にご協力致したいと思っております。

私は、平成4年に本学医学部を卒業後直ちに内科学第一教室(小林健一教授)に入局し、内分泌・代謝・糖尿病を臨床の専門科としました。平成9年からは、基

金沢大学医学系長・医学類長に就任

礎医学研究者に転身し、東北大学医学部医化学第一教室(岡本宏教授)で研鑽を積みました。平成12年からは、金沢大学に戻り、生化学第二教室のちの血管分子生物学教室(山本博教授)で助手・助教・講師として教育・研究活動に従事しました。平成18年からの約3年間は、ハーバード大学医学部ジョスリン糖尿病センター(Shoelson教授)に留学し、海外の地から日本・金沢を見つめ直す好機に恵まれました。帰国後は、再び血管分子生物学教室(山本博教授)で、講師・准教授として薫陶を受け、平成27年からは血管分子生物学教室の教授として教室運営を行っております。平成30年からは、医学系副系長(教務担当)・医学類教育委員長(和田隆志医学系長・医学類長～杉山和久医学系長・医学類長)としまして、コロナ禍を含め6年間にわたり貴重な経験を積ませていただき、その間にも、令和2年から学長補佐として、国際担当、入試・学生募集・高大院接続・大学院改革担当の管理運営業務について大学本部で学ぶ機会に恵まれました。これまでの経験を活かし、医学系・医学類の管理運営に貢献したいと思っております。

大学は現在、我が国の成長と未来のために、急激な大学改革の渦中にあり、そして、医学分野では未来の医療を見据えた医学教育改革が待ったなしで進んでいます。医学系・医学類におきましても、

入学者選抜、卒前・卒後教育、大学院教育、キャリア形成支援、生涯学習などの多方面において、時代に取り残されることなく、社会からの要望に添えていきます。研究・社会貢献におきましても、独創的な世界トップレベルの研究拠点形成に向け研究の活性化をさらに進め、グローバルに活躍できる次世代若手研究医の養成にも力を注ぎます。学びやすい働きやすい環境の整備、ダイバーシティ環境の向上、業務の効率化・質的向上にも繋げて、地域医療を担う人材とともに世界の医療を牽引する高度医療人材や研究医の育成も引き続き行っております。

金沢大学医学系・医学類の更なる発展のためには、日本でも屈指の長い歴史を有する医学校としての歴史と伝統を重んじ、自己点検と改善・改革を不退転の覚悟で行っていくことが必要です。十全同窓会会員の先生方をはじめとする多くのステークホルダーの皆さま方、学生や教職員の皆さま方とともに情報交換や交流をしながら、そして、ご意見やご協力を頂きながら高みを目指していきたいと思っております。

十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。





吉崎 智一 博士

(昭和61年卒業)

医療分野での復旧復興支援と 高度医療を担うスタッフ育成

この度、2024年4月1日から金沢大学附属病院院長を拝命しました。私は1986年に金沢大学医学部を卒業し、耳鼻咽喉科学教室に進み、故梅田良三名誉教授、古川仍名誉教授の薫陶を受け、2010年に本教室の教授に就任しました。その後、教室名は私の専門とする頭頸部癌、頭頸部外科を含む形で耳鼻咽喉科・頭頸部外科額教室となり現在に至っています。教

金沢大学副学長に就任 金沢大学附属病院長に就任

授に就任して間もなく卒後臨床研修センター長として長きにわたり医師臨床研修から専門医制度に携わってまいりました。それとオーバーラップする形で2014年から10年間、附属病院副病院長として、総務、臨床教育、人事担当の任に当たりました。蒲田敏文前病院長の警咳に接する場所からその見事なリーダーシップを学ばせていただきました。今度は私が先生の衣鉢を継いで、教職員が明るく元気に活躍し、患者さんに安心安全な高度医療を提供・開発とともに、学生・研修医・専攻医が将来働きたいと思える金沢大学附属病院づくりを目標に舵取り、そして旗振り役を全力を尽くして務めさせていただきます。

ご存知の通り、今年の1月1日の震災後は、病院スタッフはもとより、基礎系の先生方の協力を得て、災害対応にあたりながらも通常の高度な医療の提供を続けることができました。今後も中長期的な視点に立って主として医療の分野で復旧復興支援にあたりたいと思います。

附属病院ではこの3月に第2中央診

療棟が稼働を始めました。特に、術中MRI、2方向血管造影が可能なハイブリッド手術室、ロボット対応を念頭に置いた手術室、感染症患者の手術を念頭に置いた手術室、など、高度で先鋭的な外科系診療、研究が可能となりました。あとはなんといってもそれを担う各種スタッフの育成です。これからどの業種も人手不足の深刻化が危惧されています。処遇面でも十分と言えない上に働き方改革の波がやってきて、現在の医師臨床研修制度施行に端を発した大学病院離れが加速することが懸念されています。大学病院単体でなく金沢大学関連病院群として医学生時代からの臨床教育を通して、金沢大学医学生が少しでも多く、北陸の地で研修を受け、金沢大学の講座に魅力を感じて在籍してくれるように、大きな仕組みを考えて運用してゆく必要があることを、どうか十全同窓会の皆さまにもご理解いただき、お知恵とお力をお貸しいただけますようお願いしまして、就任のご挨拶とさせていただきます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。



就任挨拶



所 正治 博士

(特別会員)

効果的な国際感染症コントロールを
分野横断的に目指す

令和5年8月1日に金沢大学医薬保健研究域医学系国際感染症制御学の教授を拝命いたしました。十全同窓会の会員の

金沢大学医薬保健研究域医学系
国際感染症制御学教授に就任

皆さまに御挨拶を申し上げます。

国際感染症制御学講座は、ウイルス感染症および寄生虫感染症の各制御学講座を統合した基礎系の新講座になります。ウイルス学講座は1999年の市村宏教授の赴任に伴い創設され、また、寄生虫学講座は1974年に創設後、吉村裕之、近藤力王至、井関基弘の各教授が主宰され、2005年からは私が教室主任を務めてまいりました。2021年4月、市村教授の退官に伴い本講座が創設され、このたび正式に不肖私が教授を拝命したという経緯になります。

以上のように本講座は独立した2研究領域による統合講座となります。この特徴を活かしまして、各領域の独自研究を追求すると同時に両領域の専門性を持ち寄った協力研究を推進し、効果的な国際

感染症対策の構築に貢献してまいります。

また、両分野とも途上国における感染症の分子疫学を専門としてきたことから、国際協力の面で幅広い研究ネットワークを構築してきました。現在も、インドネシア人、中国人、マダガスカル人の医師・検査技師が当講座に在籍しており、日本人学生と肩を並べ研究を遂行しています。当教室における若手研究者の協力関係が生涯にわたる国際研究協力の礎となり次世代に継承されていくことを期待しています。

当教室は、また、日本全国から寄せられる寄生虫検査を担当しております。寄生虫感染が疑われる症例等がありましたら、お気軽にお声かけください。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。



北尾 梓 博士

(平成14年卒業)

教育、研究、診療を通して
これからの放射線診療に貢献

令和6年3月1日付で、金沢大学医薬保健研究域保健学系医療科学領域量子医療技術学講座の教授を拝命いたしました。放射線科の松井修名誉教授、蒲田敏文名

金沢大学医薬保健研究域保健学系
医療科学領域量子医療技術学講座教授に就任

誉教授、小林聡教授をはじめ、ご指導いただきました皆さまにこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

私は平成14年に金沢大学医学部を卒業し、同年に松井修教授が主宰される金沢大学の放射線科教室に入局いたしました。入局後は金沢大学附属病院および関連病院にて臨床経験を積み、放射線診断専門医として画像診断と画像下治療に長年携わってまいりました。

大学院では形態機能病理学の中沼安二教授のもとで研究する機会をいただき、「多段階発癌における肝細胞癌の流出静脈の変化と動脈造影下CT所見との対比」の論文で学位を取得いたしました。平成20年に肝特異性MRI造影剤Gd-EOB-DTPAが日本で発売されたことが契機となり、この造影剤を輸送する肝細胞膜トランスポーターに関する研究を開

始いたしました。その後も放射線科、病理学教室、消化器内科、肝胆膵外科の先生方のご指導のもと、肝細胞癌の悪性度や予後の予測、治療効果予測に有用な画像バイオマーカーに関する研究を継続してまいりました。

今後はこれまでの臨床経験を活かして診療放射線技師を目指す学生の育成に取り組んでいくとともに、医学系・保健学系を問わずさまざまな専門分野の先生方と協力し合いながら新たな研究分野に挑戦していきたいと考えております。微力ではございますが、教育、研究、診療と様々なかたちでこれからの放射線診療の発展のために力を尽くす所存です。金沢大学十全同窓会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



川野 充弘 博士

(昭和62年卒業)

世界最先端のリウマチ診療を 北陸で実践したい

令和6(2024)年1月1日付けで金沢医科大学血液免疫学の臨床教授を拝命しました。

金沢医科大学血液免疫学臨床教授に就任

私は、昭和62(1987)年に金沢大学医学部を卒業し、4月より竹田亮祐教授が主宰する金沢大学第二内科に入局しました。その後、紺井一郎先生がチーフの第3研究室で腎疾患の診療に従事しながら、その中のリウマチ膠原病グループの一員として研鑽を積んでまいりました。

リウマチ膠原病の中では、特にシェーグレン症候群を専門として臨床研究を行い、抗セントロメア抗体陽性原発性シェーグレン症候群という疾患概念を確立しました。また、シェーグレン症候群の臨床を行う中で、多くのミクリッツ病の患者さんに出会い、日本から世界に向けて、新しい全身疾患であるIgG4関連疾患の疾患概念の確立に寄与することができました。平成19(2007)年より日本のIgG4関連疾患研究会を主催させていただき、令和元(2019)年に研究会が日

本IgG4関連疾患学会に昇格後は初代理事長を拝命しており、令和5年度からは厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患政策研究事業)IgG4関連疾患研究班代表者も務めております。

金沢医科大学では、私の得意とするリウマチ・膠原病内科の臨床を北陸で発展させるために、北陸で初のリウマチ・膠原病センターを設立したいと考えております。リウマチ・膠原病センターでは、患者会とのネットワークの構築や、能登地区との密接な病診連携、チーム医療を効率よく行うための円滑なシステムの確立、リウマチ・膠原病診療をになう専門医の育成を通じて、世界最先端のリウマチ診療を北陸で実践する予定です。

金沢大学十全同窓会の先生方におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



遠山 直志 博士

(平成15年卒業)

腎臓内科学の未来を 切り拓く

令和6年4月1日付けで、福井大学医学部腎臓病態内科学分野教授を拝命いたしました。十全同窓会の皆さまに謹んで

福井大学医学部腎臓病態内科学分野教授に就任

御挨拶申し上げます。私は平成15年に本学を卒業後、旧第一内科に入局し、金子周一先生、岩田恭宜先生をはじめ多くの先生のご指導のもと金沢大学附属病院および関連病院で研修をさせていただきました。そこで学んだ全人的な医療の実践は、私の診療の基礎となっています。この経験は私の医師としての土台であり、先生方のご指導の賜物と深く感謝しております。

研究では腎疾患の臨床疫学を中心に行ってきました。糖尿病性腎症のリスク因子評価やSGLT2阻害薬の有効性評価など、国内外の研究者と協力し多くの研究を行って来ました。博士号を取得後には、豪州ジョージ国際保健研究所へ留学する機会を二度いただき、最先端の臨床疫学を学ぶことができました。現在は機械学習を活用した個別化医療研究の開発

と実証研究に取り組んでおります。これらの研究を通じて、腎疾患の予防と治療に少しでも貢献できればと考えております。研究および臨床のご指導をいただきました和田隆志先生に深く感謝申し上げます。

福井大学医学部腎臓病態内科学講座という伝統ある講座でお仕事をさせていただけることを、大変光栄に存じております。諸先輩からの教えを大切に、腎臓内科学の未来を切り拓き、患者さんの健やかな生活に貢献することを目標に、日々精進してまいります。また、次世代を担う医療人の育成として学生教育、卒後臨床研修をはじめ、人材育成にも積極的に取り組んでまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

退職のご挨拶



金沢大学医薬保健研究域医学系
眼科学

杉山 和久

皆さまへの感謝 そして Happy Retirement

この度、2002年12月から21年間4カ月の長きにわたり務めさせていただきました金沢大学眼科学教室教授を退任することになりました。十全同窓会の諸先生方、眼科学教室員、眼科学教室同門の先生方、そして大学関係者の皆さまには、心より感謝しております。長年ご支援・ご指導いただき、ありがとうございました。

思い起こせば、金沢大学を1984年に卒業後に故郷の岐阜に戻り、研修医から助教授まで18年半を過ごし、当時岐阜大学眼科教授であった恩師北澤克明先生との出会いから、緑内障を専門としました。その間2年間のアメリカ留学、1年間の関連病院勤務を除いては15年間の大学勤務でした。

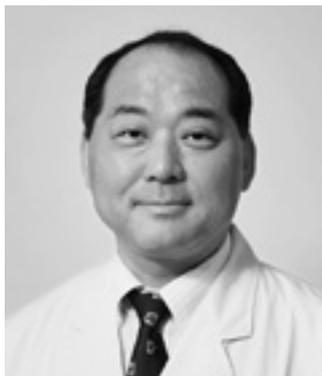
金沢大学眼科に教授として赴任してからは、多くの教室の先生方の助けを得て、無事教授職を全うすることができました。時に困難に直面することもありましたが、自分が赴任時、最初に描いたイメージ通りの教室づくり、専門外来の運営、病診連携、臨床研究、基礎研究などができたのではないかと、安堵しております。未だ力不足で足りなかった点については、基礎医学教室との連携、関連病院の拡充、教育システムの充実、海外の大学との連携(留学)など多々ありますが、次期教授

に期待するとともに、私自身も退任後も何らかのかたちで応援できたらと思います。

最後の4年間はコロナとの闘いもありましたが、医学系長・医学類長として、医学部の管理・運営の業務に忙殺されて、教室運営、学会活動、眼科学の仕事が不十分であったと猛省しております。定年後はゆっくり過ごすというよりも、自身の学会活動や緑内障専門の眼科医の仕事継続したいと思っております。緑内障診療・研究での社会への貢献が認められて北國文化賞を戴いたこともあり、第2の人生は緑内障にかかわる仕事で社会に貢献したいという思いを強く持ちました。

皆さまのお蔭をもちまして、Happy Retirementを迎えることができました。私自身の実体験から、人生には死ぬほどつらいこともあります。その困難を乗り越えてこそ幸せが来るというのが、私の信念です。「人間万事塞翁が馬」が私の人生訓であります。今まで通り、人との出会いを大切に、ポジティブ思考で行くつもりです。今後は眼科学教室の発展、金沢大学医学系と附属病院のさらなる飛躍を外から見守りたいと思います。十全同窓会の皆さまには長い間、お世話になりました。ありがとうございます。





金沢大学医薬保健研究域医学系
産科婦人科学

藤原 浩

この度令和6年3月31日をもって金沢大学を定年退職しましたことを謹んでご挨拶申し上げます。また十全同窓会の皆さまには10年9カ月の在任期間中に大変お世話になりましたことを心より御礼申し上げます。

私は昭和58年3月に京都大学を卒業後、基幹病院での臨床研修を経て母校で産婦人科医として臨床、研究、および教育活動に従事しておりましたが、ご縁あって平成25年6月に故井上正樹名誉教授の後任として金沢大学教授(医学系産科婦人科学分野)に就任いたしました。しばらく教授不在の期間が続いたこともあって着任当時は人手不足が深刻化しており、臨床および研究の何れの部門も運営を根本から立て直す必要がございました。しかしながら幸いなことに皆さまのご協力もあり徐々に入局者が増え、大学病院での臨床や研究の体制が整備されてまいりました。

一方で、石川県の産婦人科医療では指導者層にあたる中堅医師の県外流出による空洞化が進んできており、関連病院での指導体制の脆弱化が大きな問題となっております。この課題の克服には臨床と研究ともに優れた意欲のある中堅医師の存在が必要となりますが、その人材育

成にはかなりの期間を有するため、私の在任期間中には問題の解決は完遂できませんでした。道半ばにして次の教授へ託すこととなりましたが、この2年の間に医局長や病棟医長などの経験者が、石川県立中央病院、公立松任石川中央病院、小松市民病院および浅ノ川総合病院などの基幹病院へ赴任する流れが実現しました。今後は新しい教授のもとで石川県内の関連病院との連携が推進されるものと期待しております。十全同窓会の皆さまにはぜひ引き続きご支援をいただけますようよろしくお願い申し上げます。

十全同窓会の皆さまとの最も印象深い思い出は、学生時代の京都大学でのオーケストラ活動のご縁でメディカルオーケストラ金沢に誘っていただき皆さまと演奏をご一緒できたことです。昨年11月には私が金沢で主催した第68回日本生殖医学会学術集会の懇親会でも友情出演いただきました。十全同窓会の皆さまには楽団の練習場や大型楽器の保管に関しても過分なご配慮を賜っておりますことをあらためて感謝申し上げます。

十全同窓会が、文化の香り高き金沢の地において、これからも人材育成を含めて益々ご発展されますことを心より祈念いたしております。



退職記念講演会

日時／令和6年3月8日(金)

場所／十全講堂

杉山和久教授と藤原浩教授の退職記念講演会が、令和6年3月8日(金曜日)15時から十全講堂にて開催されました。今回は医学系長の杉山教授が講演されるため、医薬保健研究域長の堀が司会をさせていただきます。久しぶりの完全な対面開催でしたが、多くの方に参加していただき感謝しております。



最初の講演者である杉山教授は昭和59年3月に金沢大学医学部医学科を卒業し、岐阜大学(医学部眼科学教室)助手、講師、助教授を経て、平成14年12月に金沢大学教授(医学系眼科学分野)に就任されました。その後21年余にわたって、眼科学の教育、緑内障の研究に努められ、また、最後の4年間は医学系長・医学類長として、金沢大学医学系の管理運営と

医学類学生の教育の責任者として大学に貢献されました。

学術研究面において、杉山教授はまず「未来の理想的な緑内障診療」というビジョンを掲げ、その実現に必要な臨床研究・基礎研究に注力されました。とりわけ、①緑内障の進行に関する研究、②視神経乳頭・網膜の血管構築と血液微小循環に関する研究、③眼圧日内変動のメカニズムに関する研究、④緑内障のレーザー治療、手術の合併症の克服に関する研究は非常に高い評価を受け、多くの学会賞等を受賞されるとともに、令和5年には北國文化賞も受賞されました。教育面においても、医学類での緑内障、社会生活論、医師国家試験対策等の講義、診療参加型学生実習、インターンシップの指導に加え、研修医、若手医師に対する外来・入院患者の診察、緑内障手術の指導、大学院生、若手医師の研究指導にも尽力されました。管理・運営面では、医学系長として将来の医学系のあり方を議論し、将来像を見据えた基礎系講座の統合と再編、内科部門の臓器別診療の再々編、そして感染症科学・臨床検査医学分野と先鋭科学融合研究分野の新設を先導されました。また、令和2年3月からのコロナ感染症蔓延による医学類のオンライン授業、オンライン実習の実施、令和4年1月に審査合格した医学教育分野別評価(国際認証)にも大変寄与されました。

講演会では、これまでの研究内容など



を中心として「未来のより良い緑内障診療を目指して—研究の面白さに感動し夢を追った反省の軌跡—」というタイトルで講演されました。臨床の現場で発生する問題点について基礎研究、特に形態学の手法を用いて解明し、その成果を再び臨床に応用する姿勢が鮮明に伝わってきました。今後は臨床の現場でまさに「理想的な緑内障診療」を実践すると述べられておりました。

次の講演者である藤原浩教授は昭和58年3月に京都大学医学部を卒業され、京都大学医学部附属病院、彦根市立病院、洛和会音羽病院、日赤和歌山医療センターでの勤務を経て、平成元年に京都大学医学部附属病院に着任、以後、産婦人科医として臨床研修を積まれました。この間、生殖内分泌学と生殖免疫学を専門分野として研究を続けられ、平成25年6月に金沢大学教授(医学系産科婦人科学分野)に就任されました。教授就任後は、内分泌学および免疫学の両側面から生殖医学と周産期学の新規知見を次々に見出され、それらを婦人科学腫瘍にも応用してこられました。教育面においては、医学類での講義、実習に加えて多く



の大学院生の学位論文を指導され、並行して周産期専門医を10名育成されました。さらに婦人科悪性疾患に対する腹腔鏡手術を導入し、婦人科専門医4名と生殖医療専門医2名を育成されました。また、診療面では周産母子センター長として石川県の周産期医療を支えるとともに、令和4年には附属病院内にプレコンセプションケアセンターを創設し、合併症妊婦に対して予防面も含めた各診療科を横断する集約的な治療の実践を可能とされました。地域医療に関しても、平成26年から石川県産婦人科学会の会長として同県の産婦人科医療水準の向上に貢献されました。さらに令和5年9月には石川県医療計画推

進委員会の小児・周産期医療対策部会長に就任され、県内の周産期医療の課題を俯瞰的に検討して種々の意見を取りまとめ、その解決に尽力されました。令和5年11月には金沢で第68回の日本生殖医学会学術集會を主催して学会と我が国の生殖医療の発展に貢献されました。

講演会では、これまでの研究内容などを中心として「新規の胚シグナルを求めて—生殖医学から腫瘍学へ—」というタイトルで講演されました。藤原先生の研究に対する情熱がひしひしと伝わってくる内容でした。今後、少し軸足を移すものの研究を継続されるとお聞きしております。どうか大所高所からご指導をいただけますと幸いです。

(堀 修：記)



佐藤保教授を偲んで

(元十全同窓会会長)

金沢大学小児科前教授・金沢大学理事 谷内江昭宏

人生の先輩としての姿

第14代金沢大学医学部十全同窓会会長であられた佐藤保先生におかれましては、令和6年2月13日に享年88歳でご逝去されました。

佐藤保先生は昭和10(1935)年3月24日に金沢市でお生まれになり、昭和35(1960)年に金沢大学医学部を卒業されました。卒業後すぐに小児科学教室に入局し助手となられ、その後、講師、助教授を務められ、平成5(1993)年からは金沢大学附属病院に創設された医療情報部(現附属病院経営企画部)の初代教授に就任されました。医療情報部では、病院情報システムの導入・運用の高度化推進、電子カルテの導入に尽力されました。平成12(2000)年に金沢大学を定年退官されてからは、石川産業保健推進センター(現石川産業保健総合支援センター)所長に就任、平成19(2007)年まで勤務していました。平成17(2005)年からは石川整枝学園(現金沢こども医療センター)小児科を兼務、平成18(2006)年からは金沢療育園施設長を併任されていました。

突然の訃報のお知らせをいただいた時、金沢大学小児科では教室の100年史の編纂が最終段階に入り、佐藤保先生には編集された原稿に目を通していただくところでした。金沢大学小児科の歴史の中でその半分以上に関わり、故谷口昂名誉教授と共に現在の教室の礎を築き、世界に発信する教室へと発展する大きな時代をつくってくださった佐藤保先生です。その先生とお別れをしなければならないのは、とても辛く、残念なことです。

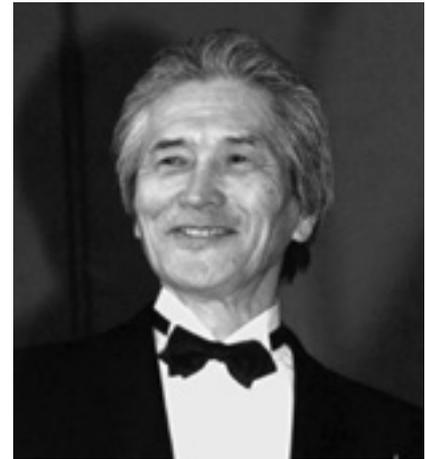
佐藤保先生は昭和54(1979)年に私自身が小児科医となった頃には、小児科助教授として金沢大学小児科の中心として教室を支える存在となっておられました。すでに超えることのできない偉大な先達として、圧倒的な存在感を示しておられました。佐藤保先生は、ダンディで一人静かに座ってタバコの煙を薫らす姿も格好良く、憧れの存在でもありました。いつか先生が米国に留学中の私たち家族の滞在先を訪ねてくださいました。その時にわが家の子どもたちは佐藤保先生のことがお気に入りとなり、夕

バコを吸う先生の姿を絵に描いていたことを懐かしく思い出します。

先生は若い小児科医に、小児科医とはこのようにあるべきだというロールモデルを示してくださいました。先生はいつも静かでしたが、お酒が入ると熱弁をふるわれ、いつも俯瞰的にみることの重要性、医師として研究者として大切なものは何かを教えてくださいました。私が小児科教授に就任した際にも、ちょうど出版されたばかりの「変貌する日本の大学教授職」という本を貸していただきました。しかし先生の期待に十分にお応えすることはなく、ついにこのようなお別れの時を迎えることになりました。

金沢大学小児科が誇る、新しい疾患概念発見の歴史の中でも、佐藤保先生の周期性ACTH・ADH分泌過剰症の記載ほど学術的に優れて、世に強いインパクトを与えたものはありません。これまでに報告されていない不思議な疾患について、その症状、病態を精緻に分析され質の高い報告を行い、多くの論文を執筆されました。さらにその治療法の開発や疾患の啓発にも尽力されました。これらの業績も評価されて、佐藤保先生は平成4(1992)年10月に金沢市において第26回日本小児内分泌学会を主催されました。

先生の周期性ACTH・ADH分泌過剰症の病態解明、治療法の開発に対する熱い思いは、ご退官の際にご自身で出版された「返事のない手紙」に書かれています。緒言に書かれた最初の患者さんとの出会いについての文章は、未だ見たことのない疾患に出会った時に我々臨床医の取るべき態度を教えてくださいました。また、随筆家であり科学者である柳澤桂子さんとの往復書簡は、圧巻の熱量で、強く心を打たれます。柳澤桂子さんのご自宅にまで出かけられて、難病に苦しむ柳澤さんに聴く姿勢は、真摯な臨床医の姿そのものです。このような佐藤保先生の研究者・医師としての活動は国際的にも知られたものとなり、すでにご退職されていた平成27(2015)年に国際的な周期性嘔吐症の患者団体(CVSA; Cyclic Vomiting Syndrome Association)の代表が、佐藤保先生を顕彰するためにわざわざ金沢大学小児科を訪ねてられました。



佐藤保先生はまた、長年にわたり十全同窓会にも大きな貢献をされました。平成8(1996)年から平成12(2000)年までは会報編集委員長として同窓会誌の編集に尽力され、さらに平成18(2006)年から平成26(2014)年までは十全同窓会会長として、金沢大学医学部同窓会の顔としての役割も果たしてくださいました。その人脈は広く、多くの人に慕われ信頼された姿は、小児科医としてだけでなく、優れた臨床医としての、また人生の先輩としての目指すべき姿でした。

先日、佐藤保先生が令和6(2024)年1月、病床にあって100周年記念誌のために綴られていた文章がご家族より私のもとに届けられました。その最後の部分には次のような言葉が記されていました。

「それぞれの学問の特異性と本質によって三教授*の在任中、教室の発展に寄与した状況が分かるのである。百周年記念式に当たり学問の特異性と各教授の人格的特性によって今日の記念式が迎えられたことを、本日ここに参集した方々は想いを致すべきではないだろうか。」

佐藤保先生がおっしゃる通り、私たち今に生きるものは、多くの尊敬すべき先達の生き様に支えられており、そして私たちはそれを数十年後の未来に活躍する後輩へと伝える役割を与えられています。佐藤保先生の精神は金沢大学小児科の、そして十全同窓会の後輩の中に脈々と受け継がれていることを信じています。これまで本当に有難うございました。そしてお疲れ様でした。心より佐藤保先生のご冥福をお祈り申し上げます。

*佐川、中島、谷口の各教授；谷内江昭

金沢から世界へ発信

実臨床を目指した 基礎研究、創薬研究、 次世代育成を柱に精進

がん進展制御研究所分子病態研究分野

後藤 典子

(平成元年卒業)

私たちは乳がん撲滅を目指し、基礎研究からトランスレーショナルリサーチへ繋げる架け橋となりうる研究成果を得ることを目標に、日々研鑽しています。現在は助教、博士研究員、大学院生、研究生、卒研究生とさまざまなレベルの若いメンバーと和気藹々と研究を行っています。外国人学生も多いため、ラボミーティングは英語、日常会話やラボ内懇親会でも英語が公用語です。

乳がんは、今や日本女性の9人に1人が一生に一回罹患する、最も罹患数の多いがんです。最新の治療により、乳がんは一旦治療に反応しますが、数年後に局所や遠隔転移として再発し予後不良となる症例が一定数あるため、死亡数は増加しています。手術前に、抗がん剤による全身治療を行う「術前全身治療」後、手術切除した乳腺組織内にがん細胞が残存する症例では、再発転移しやすいことが知られています。この再発転移を起こすがん細胞が、抗がん剤などの治療に対して抵抗性を示すメカニズムは未だ不明です。

私たちは「がん幹細胞」が世界的に注目され始めた2000年代に、乳がん幹細胞をスフェロイド培養できることをいち早く見出して以来、乳腺外科の方々の多大なるご協力を得て臨床検体のスフェロイド、オルガノイド培養、そして patient-derived xenograft (PDX) モ

デルの構築と収集を行ってきました。日本人乳がんのリソースとして最も多い200症例以上を収集しており、世界的にも貴重なアジア人のリソースを有しています。これらを用いて、乳がんのがん幹細胞を濃縮できる細胞膜タンパク質の同定を行ってきました。ごく最近、最新のシングルセル解析により、がん幹細胞集団を構成する一個一個の細胞の不均一性を見出し、この中に潜む最も治療抵抗性のがん幹細胞亜集団「祖先がん幹細胞」を見つけ出すことに成功しました。この祖先がん幹細胞は、再発転移を起こす原因細胞として近年世界的に注目されている drug-tolerant persisters (DTPs) と同一の細胞集団であることがわかりました。さらに古くから心不全の治療に用いられてきた強心配糖体を用いると祖先がん幹細胞が治療感受性に变化することを見出しました。さらなる非臨床試験を実施して、drug repositioningの可能性を評価する臨床試験を実施することを目指しています。

私たちは、葉酸代謝経路の下流にあってミトコンドリア内にある酵素が担う「ミトコンドリア1炭素代謝経路」にも注目して研究を行っています。MTHFD2、MTHFD1L、SHMT2という3つの主要な酵素が存在し、細胞増殖に必要な核酸の合成に必要な経路です。さまざまながんにおいて、3つのどの酵素とも発現が上昇しており、がん細胞の活発な増殖を支えています。つまりこの経路を特異的に抑える低分子化合物が得られれば、がん細胞の増殖を特異的に止める、副作用のない理想的な分子標的薬として広く実臨床で使える可能性があります。現在海外でも複数のベンチャー企業がミトコンドリア1炭素代謝経路阻害剤の開発にしのぎを削っています。私たちも、MTHFD2阻害剤については国内のメガファーマと共同開発を行ってきま

した。MTHFD1L阻害剤については自らがAMEDの資金等を活用して阻害剤開発を行っています。私が留学した先のエール大学の教授は創薬ベンチャーを複数立ち上げ、どれも成功しています。今も共同研究を続けており、私自身も実臨床で使用される創薬開発を大きな目標に、日々研究を続けています。

以上、最近の研究内容をご紹介いたしました。今後も実臨床を目指した基礎研究、創薬研究、そして次世代の育成を大きな柱として、世界へと発信できる成果が得られるよう精進する所存です。これからも同窓会皆さまの厚いご支援を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。



受賞

2023年度
日本医療薬学会賞受賞

崔 吉道

(特別会員)

金沢大学附属病院薬剤部

この度、「薬物体内動態制御と薬物療法の個別最適化を目指したリバーストランスレーショナル研究」について2023年度日本医療薬学会賞を受賞しましたので謹んでご報告いたします。

日本医療薬学会は、前身の日本病院薬学会から35年目となる会員数約14,000名の学会です。リバーストランスレーショナル研究は、臨床の課題を基礎研究で掘り下げその成果を臨床にフィードバックするものです。著者は1994年から基礎研究面では、薬物の吸収や分布、排泄を担う様々なSLCおよびABCトランスポーターの分子同定と組織細胞内局在性、薬物輸送特性の解明、血液-組織関門の薬物動態制御メカニズム解明に取り組んできました。2009年に臨床の場である薬剤部に異動後はMRSA感染症例に対する腎障害時のリネゾリドの体内動態変化に関する臨床試験等、病態や生理機能変動が薬物体内動態に与える影響について基礎と臨床の両面から研究を展開してきました。最近では、経口摂取困難な患者に施行される簡易懸濁法の中で、レボフロキサシン錠とランソプラゾール錠の同時懸濁時の凝集を端緒として、併用薬剤の製剤添加物と主薬との配合変化による吸収遅延という新規の薬物相互作用の発見や、リトドリンによる切迫早産治療後の新生児低血糖症発現リスク因子の解明を出発点として、リトドリンの胎児移行性、メタボロミクス、プロテオミクスの知見をもとに新生児低血糖リスク低減を目指した研究に取り組んでいます。

今回の受賞は本院薬剤部の教職員、学生のみならず、学内外の多くの診療科、多職種の方々の共同研究やご支援の賜物です。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

日本放射線腫瘍学会第36回学術大会
優秀教育発表奨励賞受賞

高松 繁行

(平成13年卒業)

金沢大学放射線科

この度、日本放射線腫瘍学会第36回学術大会において、「多発肝海綿状肝血管腫に放射線治療を行った3例の検討」の演題にて受賞致しましたので、謹んでご報告申し上げます。

肝海綿状血管腫は、高頻度に遭遇する良性病変ですが、時に多発し増大傾向を認め、播種性血管内凝固症候群など、重篤な症状を呈します。その場合に手術(肝切除・肝移植)や動脈塞栓術などが検討され、他治療が困難な場合に放射線治療が適応となります。今回の3症例では、いずれも照射後病巣は縮小し、局所制御を得ましたが、照射野外の一部他病巣が長期的な経過で増大しました。一例では、初回照射後7年後に再度の放射線治療を要し、また初回照射22年後に放射線治療による2次発がん(放射線誘発二次悪性腫瘍)を否定できない乳がんを発症しました。悪性腫瘍に対する高精度な根治的放射線治療ばかりが、注目される昨今ですが、良性腫瘍に対する放射線治療も大事な一つの役割であると考えています。しかし良性疾患に対する放射線治療については長期的な予後が見込めるため、小児がんへの放射線治療と同じく、被爆による2次発がんを常に念頭に置いた治療戦略の検討が必要であると考えます。希少疾患ですが、最適な放射線治療の手法の開発など臨床に役立てられるよう、今後も研究を継続的に行きたいと考えております。

最後に発表にあたり、ご指導をいただきました蒲田敏文名誉教授、小林聡教授をはじめ、金沢大学放射線科・放射線治療科の同門の先生方やスタッフの皆さま方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

日本循環器学会 Circulation
Journal Award 2023 Clinical
Investigation部門 優秀賞受賞

多田 隼人

(平成15年卒業)

金沢大学附属病院循環器内科

この度、日本循環器学会の学術雑誌 Circulation Journal に採択されました「Impact of High-Density Lipoprotein Function, Rather Than High-Density Lipoprotein Cholesterol Level, on Cardiovascular Disease Among Patients With Familial Hypercholesterolemia」が、Circulation Journal Award 2023 Clinical Investigation 部門 優秀賞に選出されましたのでご報告申し上げます。

HDLコレステロールは「善玉」コレステロールと称され、疫学的には数値が高い場合には抗動脈硬化であるとされてきました。この知見を基にこれまでHDLコレステロール値の上昇作用を有する薬剤を用いて臨床試験が繰り返されましたが、動脈硬化性疾患抑制の確たるエビデンスは得られておりませんでした。そもそもHDLにはコレステロール引き抜きなどの機能がありますが、このような「質」を評価する試みが近年注目を集めるようになり、HDLは量ではなく質が重要かもしれない、と示唆するデータを基に今回の臨床研究を企画いたしました。動脈硬化の「モデル疾患」といふべき家族性高コレステロール血症患者さんに対してHDL機能(つまり質)を評価し動脈硬化との関連を調査したところ、HDLコレステロール(つまり量)よりもむしろコレステロール引き抜き能(つまり質)が強く関連することが判明いたしました。本知見は、これまでのHDLコレステロールに対する概念を大きく変え得るものであり、また一般の方でもHDLコレステロール値は検診で測定しますが、質を評価する検診は未だに皆無です。このような評価が一般的となり、予防医療に貢献しうるほか、HDL機能を改善しうる薬剤の開発などに繋がるものと期待しているところです。

本研究についてご指導いただきました高村雅之教授ならびに金沢大学循環器内科のスタッフ、また共同研究機関の神戸大学、シスメックス株式会社の関係者に深謝申し上げます。

第63回日本核医学会 ライターニ奨励賞受賞

若林 大志

(平成17年卒業)

金沢大学附属病院核医学診療科

この度令和6年11月16日から18日にかけて開催された第63回日本核医学学会学術総会において日本核医学会ライターニ奨励賞を受賞致しましたので、謹んでご報告申し上げます。

本賞は海外への留学経験があり核医学についての研究、診療、教育分野で活躍する若手会員に与えられます。ドイツヴュルツブルグ大学での学びと、金沢大学での業績が認められたことを非常に光栄と思います。

私が留学した樋口隆弘教授の研究室では、PETを用いた分子イメージングの手法で候補化合物の標的細胞・分子への薬物動態を捉え、病態を解明する研究が行われています。私も実験に参加し、腎臓、心臓のPET製剤に関連する論文を、共著含め多数報告することができました。帰国後の診療では¹³¹I-MIBG治療に関連した先進医療、企業治験、医師主導治験に携わりました。また、看護研究を指導し、核医学治療における看護師の役割、被曝管理に関する英文報告も行いました。基礎研究では心筋虚血ラットモデルで、虚血後心筋にシグマ1受容体が発現することを世界で初めて報告しました。また、核医学の普及に向け、心臓核医学の地域別研修会の開催や核医学治療の国内講演、海外招待発表を積極的に行いました。

末筆ではございますが、決して自分一人の力では成し遂げることはできなかったものであります。今回の受賞にあたりご指導いただきました絹谷清剛教授をはじめ、核医学同門の先生方やスタッフの皆さまにこの場を借りて厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

第63回日本核医学会学術総会 研究奨励賞受賞

廣正 智

(平成25年卒業)

金沢大学附属病院核医学診療科

この度、第63回日本核医学会学術総会において「難治性褐色細胞腫およびパラガングリオーマにおける¹³¹I-mIBG治療後の予後因子の検討」と題した2022年の論文で研究奨励賞を賜りましたので謹んでご報告申し上げます。

¹³¹I-メタヨードベンジルグアニジン(¹³¹I-mIBG)を用いた核医学治療は難治性・転移性の褐色細胞腫・パラガングリオーマ(PPGL)に対する数少ない治療法で、2021年に保険収載されるまで本邦では「医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬」に該当しました。さらに本疾患の希少性ゆえに、依然として¹³¹I-mIBG治療後の転帰および予後因子は多くの不明な点を残していました。そのため本研究では、当施設において2009年～2019年に臨床研究として¹³¹I-mIBG療法を受けた症例データを元に、¹³¹I-mIBG治療効果ならびに予後因子を検討しました。結果、治療効果判定し得た症例の最良有効評価における奏効率は20.9%でした。また多変量解析にて¹³¹I-mIBG治療に対する最良有効評価が病勢進行であること、便秘症状を有することが予後不良因子であると示し、¹³¹I-mIBG治療が難治性PPGLの病勢コントロールの良い選択肢である可能性を示しました。これら研究成果として本賞を受賞できたことを大変光栄に存じます。

本研究においてご指導いただきました絹谷清剛教授、若林大志先生をはじめ、核医学診療科教室の先生方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

第339日本小児科学会北陸地方会 若手優秀演題賞受賞

田中 大貴

(令和元年卒業)

金沢大学附属病院小児科

この度、令和5年12月3日に開催されました第339回日本小児科学会北陸地方会で、「全身性エリテマトーデスに血栓性血小板減少性紫斑病を合併し、血漿交換や生物学的製剤の組み合わせで治療した一例」について発表し、若手優秀演題賞を受賞致しましたので、謹んでご報告申し上げます。

血栓性血小板減少性紫斑病(TTP)はADAMTS13活性が低下することで、高分子量vonWillebrand因子重合体(UL-VWF)が切断されず、全身の微小血管に血小板血栓が形成され、様々な臓器障害を来す疾患です。全身性エリテマトーデス(SLE)では抗ADAMTS13抗体が産生されることでADAMTS13活性が低下し、TTPを発症することがあります。TTPの治療には、迅速な血漿交換の導入が重要とされていますが、近年ではリツキシマブやカブラズマブなどの新規薬剤の有効性が知られるようになりました。血漿交換では、UL-VWFや抗ADAMTS13抗体の除去とADAMTS13の補充が期待できます。リツキシマブでは、Bリンパ球を除去することで抗ADAMTS13抗体を減少させます。また、カブラズマブはUL-VWFの血小板吸着部位に結合することで、血小板血栓の形成を阻害します。

本症例では、SLEに伴いTTPを発症しましたが、抗ADAMTS13抗体産生によってTTPを発症したと考えられ、速やかな血漿交換の導入と、リツキシマブ、カブラズマブの投与を組み合わせることで治療を行いました。その結果、後遺症なく退院することができ、半年以上再発もなく経過しています。

この経験から、TTPの急性期治療は、病態に応じた治療を組み合わせることが重要であると考えました。

最後に、今回の受賞にあたりご指導を賜りました和田泰三教授、横山忠史先生をはじめとする小児科学教室の先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

受賞

Arthroscopy Honors Award Winners for Excellence in Basic Science Research 受賞

木村 光宏

(令和5年度大学院修了)

金沢大学整形外科

この度、「ウサギ半月板欠損モデルにおいて脂肪由来幹細胞（ADSC）シートで再生した半月板様組織の力学的特性の評価」に関して、Arthroscopy: The Journal of Arthroscopic & Related Surgery で報告した論文が Arthroscopy Honors Award Winners for Excellence in Basic Science Research を受賞しましたので、謹んでご報告申し上げます。

半月板は、荷重負荷の分散や膝関節の安定性といった働きがありますが、血流が乏しく、修復しにくい組織であり、損

傷した場合には生物学的な修復反応の促進を得るための外的因子が必要です。我々のグループの先行研究ではウサギの半月板欠損モデルに ADSC シートを移植すると、対照群と比較し、再生される半月板組織は大きくなり、組織学的スコアも向上することを報告してきましたが、再生された半月板組織の力学的特性に関しては不明でした。本研究では再生された半月板組織に引張試験と圧縮試験を行い、ADSC シート移植群が対照群と比較し、高い弾性率と引張強度を有していたこと、また半月板-脛骨間の接触面積や被覆率が増加し、最大圧力が低下していたことを明らかにしました。再生される半月板自体かなり小さく、力学試験の報告もほとんどなかったため、力学試験機に設置するための治具を一から設計・作製したり、圧力を測定するための適切なフィルムを探したりと、実験方法を確立するのが、非常に困難でしたが、多くの先生方のご指導

を受けながら、最後まで遂行することができました。

本研究におきまして、熱心にご指導いただきました土屋弘行名誉教授、中瀬順介助教をはじめ、金沢大学整形外科同門の先生方に熱く御礼申し上げます。また寄稿の機会を賜りました十全同窓会の先生方にも深く感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻の程、何とぞよろしくお願い申し上げます。



2024年度 金沢大学医学部十全同窓会総会

日時 2024年7月6日(土) 午前9時
場所 十全講堂

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、報告
- 一、医学系・医学類報告
- 一、医薬保健学総合研究科報告
- 一、先進予防医学研究科報告
- 一、高安賞贈呈式
- 一、支部紹介
- 一、議案審議
 - (一) 2023年度事業及び決算報告
 - (二) 監査報告
 - (三) 2024年度事業計画及び予算(案)
 - (四) 役員改選
 - (五) 会則改訂
 - (六) その他
- 一、閉会の辞

中村 裕之 理事長
 山本 靖彦 医学系長・医学類長
 河崎 洋志 医薬保健学総合研究科長
 田嶋 敦 先進予防医学研究科長

《教授就任記念講演》午前10時

- アルツハイマー病の抗治療法の現状と展望 小野賢二郎 教授
- 脳神経内科学
- 肝画像診断の将来展望…形態から病理・病態、機能の可視化を目指して 小林 聡 教授
- 放射線科学
- グローバル水準の医学教育を目指して 太田 邦雄 教授
- 医学教育学
- 慢性腎臓病の克服を目指して 岩田 恭宜 教授
- 腎臓・リウマチ膠原病内科学

◇教授就任講演は、医薬保健学総合研究科博士課程の「Up-to-dataセミナー」として認定します。
◇教授就任講演後、軽食・お飲み物を一用意いたしております。

学会報告等

第5回金沢大学子どもこころサミット

会期/令和6年3月19日(火)～20日(水) 場所/金沢大学医学図書館十全記念スタジオ

2024年3月19日から20日にかけて開催された「第5回金沢大学子どもこころサミット」は、災害時の子どもこころのケアをテーマに、多様な専門家が一堂に会し、研究成果や実践事例を共有する場となりました。和田隆志金沢大学学長からは、災害時の地域への貢献と復興支援に全力を尽くす大学の姿勢が強調されました。また、子どもこころの発達研究センターの活動が、学术界および地域教育に貢献することへの期待が述べられました。

このサミットは、基礎医学の研究者集

会や災害と子どもこころのケアに関する講演、ムーンショット型研究開発制度の進捗報告会、学校×サイエンスの新展開に関するシンポジウムなど、多岐にわたるプログラムが組まれました。これらの講演は、災害時における子どもこころのケアにも新たな視点を提供しました。そして、学校教育と科学研究の連携による子どもたちの教育の在り方についても議論が行われました。この議論は、科学的エビデンスに基づく教育の実現と、地域の学校教育と大学との良好な連携を促進することを目指しています。

このように、第5回金沢大学子どもこころサミットは、災害時の子どもこころのケアと教育の在り方に関する多様な知見が共有され、今後の取り組みに大きな期待が寄せられる盛況な会となりました。今後も、子どもこころの発達研究センターは、震災後の子どもこころのケアに関する研究と実践の発展にも貢献できるように、尽力してまいります。

(第5回金沢大学子どもこころサミット
主催者 菊池 充：記)



金沢大学附属病院第2中央診療棟竣工

令和5年12月末をもって第2中央診療棟(新手術棟)の新築工事が完成いたしました。十全同窓会の皆さまにご報告できますことは私にとっても非常に光栄なことです。

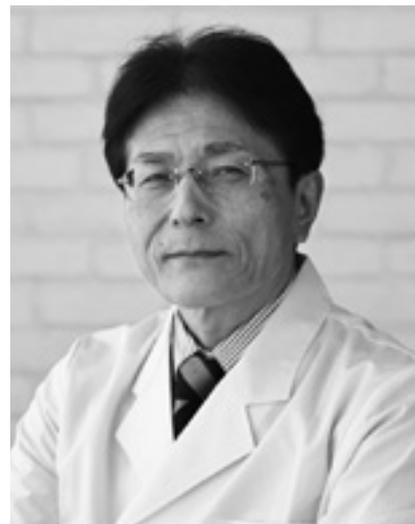
新棟建設に至った経緯を簡単にご説明いたします。私は2016年4月に金沢大学附属病院院長に就任しました。翌2017年には入院待ち患者数が1000名に迫り、そのうち手術待ち患者数が500名を超える状態が続くようになりました。手術時間の長い腹部の悪性腫瘍では手術まで数カ月かかることもありました。金大病院には手術室が15室あり、1日平均28件程度の手術を行っていましたが、需要に供給が追いつかない状況でした。解決策は手術室を増やすしかありませんが、空きスペースがない状況でしたので不可能と言われていました。

2017年7月に先進医学センターと中央診療棟の間にスペース(駐車場)があることに気づき、ここに新手術棟を建設しようと思ひました。そして執行部の先生方の賛同を得て、すぐに新棟建設計画をスタートさせることにしました。大学本部の支援も頂き、2020年7

月には文科省に申請し、2020年末には文科省の承認を得ることができました。2020年3月頃から日本全国に新型コロナウイルス感染症が蔓延しました。建築申請がもう半年遅れていたら、その後の附属病院の経営状況の悪化を考えると新棟建設計画の承認は得られなかったのではないかと思います。建築申請がぎりぎり間に合ったのは幸運であったとしか言いようがありません。

新棟の建設工事はコロナ禍の真っ只中の2021年4月に開始されました。耐震工事の追加やウクライナ戦争の影響による建築資材の高騰があり、建設費がかなり膨らんでしまいましたが、2023年12月末に新棟を無事完成させることができました。

第2中央診療棟は4階からなり、第一中央診療棟とは廊下でつながっています。1階は画像診断装置や事務部門が入ります。2階は外来化学療法部門が入り、ベッドの数も増え、すでに稼働を始めました。3階は病理部門やがんゲノム部門が入ります。4階は6つの手術室が新設され、合計で20室となりました。3TのMRI装置を手術室に配備し、脳神経外



科の手術中にMRI撮影が可能となります。また、3台のロボット手術装置(ダ・ヴィンチ2台、ヒノトリ1台)も導入しました。

第2中央診療棟の新手術室は3月18日(月)より運用を開始しました。私は3月末をもって附属病院院長を退任いたしますが、新棟が金沢大学附属病院の診療、研究、教育の発展に大きく貢献してくれるものと期待しております。

(金沢大学附属病院院長 蒲田 敏文：記)



第2中央診療棟の外観



3T術中MRI装置



ロボット手術装置

医師国家試験結果

2024年2月3日と4日の2日間にわたって実施されました第118回医師国家試験の合格者が、2024年3月15日に厚生労働省から発表されました。金沢大学医学類の合格状況も含めて報告いたします。

全国の受験者数は10,336名で、そのうち合格者は9,547名、合格率は92.4%（新卒者95.4%、既卒者58.9%）でした。金沢大学医学類では総数として138名が受験し、126名が合格で合格率91.3%（新卒者96.7%、既卒者52.9%）と、全国平均の92.4%を少し下回りました。今回は既卒の受験者が17名おり、うち9名は合格、8名が不合格であったということが影響していると考えています。ここ数年間の新卒者の合格率の推移は、96.7%（2017年度）、96.2%（2018年度）、94.2%（2019年度）、95.5%（2020年度）、91.0%（2021年度）、90.2%（2022年度）

であり、今回は96.7%（2023年度）と回復し改善いたしました。

医学類教育委員会と医学教育研究センターでは、引き続き医学教育カリキュラム改革とともに、学修支援対策を講じ、新卒者の100%合格を目指していきます。

医学類学生支援委員会、教育委員会、医学教育研究センター、チューター教員、

学生課学務係の教職員、そして、医学類医王保護会がともに情報を共有しながら、低学年から高学年まで、学生へのきめ細かいサポートを行っていきます。今後も医学類では、次代を担う医師・医学研究者の育成を進めてまいります。

（杉山 和久：記）

第118回医師国家試験結果 ※（ ）内は第117回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
令和6年3月 卒業者	121名 (122名)	117名 (110名)	4名	96.7% (90.2%)	95.4% (94.9%)
令和5年3月 以前の卒業者	17名 (13名)	9名 (9名)	8名	52.9% (69.2%)	58.9% (55.2%)
合計	138名 (135名)	126名 (119名)	12名	91.3% (88.1%)	92.4% (91.6%)



連絡先の変更・ご異動の際は、
金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトをご活用ください

URL <https://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

会員情報変更はこちら



ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp

病院紹介

羽咋病院



当院の歩み

公立羽咋病院は、いわゆる口能登、羽咋市に立地する羽咋市・志賀町・宝達志水町の1市2町からなる広域圏組合立の病院です。令和6年1月1日の能登半島地震では震度5強の揺れに襲われ、漏水等の被害がありました。診療機能は維持でき、被害患者さんの受け入れ等災害医療に取り組みました。昭和9年9月に伝染病予防組合としてスタート、昭和44年1月から現在地に新築移転し現在に至っています。

当院の現状

当院は、14科(内科・循環器科・小児科・外科・整形外科・脳神経外科・皮膚科・泌尿器科・形成外科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・放射線科・リハビリテーション科)を標榜する3病棟、174床、看護単位10:1の病院で、地域密着型病院として1病棟は地域包括ケア病棟として運用しています。医療サービス推進室を設けており地域との接点として活動しています。病院理念は「人にやさしく、信頼される病院」で、基本方針として1)納得できる医療、2)地域に必要な医療、3)

安全で良質な医療の提供を掲げています。

2004年から日本医療機能評価機構の認定病院で現在も継続しています。通常診療として、心臓カテーテル検査・治療、消化管内視鏡診断・治療、血液透析、脊椎内視鏡手術、白内障手術等を数多く実施しています。生活習慣病の予防活動、リハビリと栄養、地域の歯科医との医科歯科連携にも取り組んでいます。さらに、救急医療・災害医療にも積極的に取り組んでおり、救急搬送数は年間950台で、羽咋市救急の70%近くをカバーしています。また、中越地震、2007年の能登半島地震、東日本大震災には早期から医療班が出勤しました。コロナ禍においても、武漢からの引揚者対応にDMATを派遣し、地域の感染患者さんの受け入れにも早くから取り組みました。今回の地震では、災害対策本部を立ち上げ、当日は3人の心肺停止例を含め30人を超す骨折等の患者さんに対応し、富来病院から計20名近くの患者さんの受け入れも行いました。

また、研究活動・業務改善活動も活発に行われており、令和3年に日本看護協会会長賞を「タスクシフト・多職種連携部門」で受賞しています。病院経営も順

調に推移しており、令和5年度で29年間連続黒字経営を達成しました。令和3年9月には健全経営・コロナ対応等で総務大臣表彰を受けています。

今後の課題

当地区においても高齢化と人口減少が問題で、羽咋市の人口減少率は年間5%、高齢化率は40%となっています。特に年少人口(0-14歳)、生産年齢人口(15-64歳)の減少が目立っており、今後の医療人材確保に懸念があります。

常勤医師は17名ですが高齢化が課題です。救急医療対応にも問題が発生しています。外来応援も含め、金沢大学、金沢医科大学からの派遣に頼っていますが先行きは明るくありません。医療制度改革が必要と痛感しています。

先行きに懸念はありますが、「我々は利潤ではなく、理念を追求する組織」「やるべき医療、やれる医療、やりたい医療のすべてをみんなで協力して実行」との信念の下、地域の安全・安心のために、しっかり医療を提供していきます。

(病院事業管理者 鶴浦 雅志:記)

概要

公立羽咋病院	
所在地	石川県羽咋市の場町松崎24
病院事業管理者	鶴浦 雅志
病床数	174床
診療科数	14

沿革

昭和9年9月	伝染病予防組合設立
昭和42年3月	公立羽咋病院に改称
昭和44年1月	現在地へ新築移転
平成23年4月	公営企業法全部適用
平成26年8月	地域包括ケア病棟運用開始
令和元年6月	全国自治体病院協議会表彰
令和3年9月	総務大臣表彰

日本赤十字社 福井赤十字病院

ご挨拶

十全同窓会の会員の皆さま、この度福井赤十字病院の紹介を差し上げる機会を頂戴いたしました。まず厚くお礼を申し上げます。

私は、昭和60(1985)年金沢大学卒業の小松和人、専門は泌尿器科です。平成17(2005)年4月に金沢大学附属病院講師から当院部長として赴任いたしました。平成27(2015)年4月に副院長、令和5(2023)年4月に当院8代目の院長に就任いたしました。これまで7代の院長は全て京都大学の出身でしたが、今般初めて金沢大学出身の院長が誕生したことになります。

当院の歩み

前身は県立医学校の附属病院であったところ大正7(1918)年附属病院の日本赤十字社への移管が決定し、当院は大正14(1925)年4月に、日本赤十字社福井支部病院としてスタートしました。診療科は5科、職員数69人での診療開始であったようです。昭和18(1943)年に福井赤十字病院と改称し、現在許可病床529床、標準診療科25科、職員数は1,100名を超える陣容にまで至りました。医師数もフルタイム勤務者は150名を超えるまでになりました。

当院の現状・今後の課題

診療機能の面では急性期医療の分野において最先端の高度な診療を担うことと理解しています。連携機関からの紹介例、ロボット支援手術に代表される高度な外科治療症例、24時間/365日体制で対応可能な新鮮脳梗塞に対する血管内治療等の救急疾患、難治性疾患、診断が困難な疾患、緻密な緩和ケアが必要な症例等が

診療の中心になります。したがって、比較的狀態の落ち着いた慢性的な症例については積極的に地域の医療機関に逆紹介をしています。

経営面では、新興感染症、少子高齢化、働き方改革、地域医療構想等に代表されるようにさまざまな懸案事項が山積しており、医療界の視界は不透明で、手探りの病院運営が続くものと覚悟しております。行政、大学、周辺の医療機関、地域との密接な協力関係の構築を目指します。

最大の課題は、何をしても経営を左右する医師をはじめとする人材の確保です。院長に就任以来、金沢大学にも何度となくご相談を申し上げております。医師だけでなく、看護師、薬剤師(福井県には薬学部がありません。)等の獲得にも常時大変な苦勞を感じております。

金沢大学・周辺の病院との関連について

福井赤十字病院といえますと、なんとなく歴史的に京都大学との縁が深いとのイメージをお持ちでは無いでしょうか？

先にも述べたように当院の在籍医師は150名を超えておりますが関連医局としては京都大学(代謝内科、神経内科、脳神経外科、呼吸器内科、呼吸器外科、外科、整形外科、形成外科、眼科、放射線科、リハビリテーション科)および福井大学(血液内科、呼吸器内科、消化器内科、外科、循環器内科、小児科、産婦人科、皮膚科、腎臓・泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、麻酔科、救急部、総合診療科、健診部、病理診断科)関連の医師が多くを占め、金沢大学関連では10名余りが、腎臓・泌尿器科、放射線科、外科に所属しています。京都大学、福井大学関連で各々40%、それ以外が20%というのが現状です。

時々尋ねられるのですが、出身大学、出身医局、

診療科ごとの壁というようなものは感じたことはありません。病院幹部でいえば、院長の私が金沢大学出身、3人の副院長は京都大学2名、福井大学1名の布陣です。また例えば外科を例に挙げると、1つの診療科の中に京都大学、福井大学、金沢大学の3つの大学医局出身者がおります。

私自身は泌尿器科医としてこれまで大変自由にさせてもらいました。院長として、病院の良き伝統である自由で和やかな雰囲気を尊重してまいります。良い雰囲気の病院にしか人は集まらないだろうと固く信じています。

金沢大学以外には京都大学、福井大学、金沢医科大学(麻酔科)との連携は常に心がけておりますし、福井県立病院や福井県済生会病院(いずれも金沢大学関連の大きな基幹病院です。)等に代表される近隣の病院との連携は大変活発です。病院単独で診療が完結する時代は過ぎました。周辺の医療機関、施設との連携を密にして地域全体で医療が完結されるよう、微力ながら尽力いたします。

十全同窓会へのお願い

初期研修、専門医取得のための後期研修、高度な技術の習得、故郷に帰る等々背景はさまざまですが、将来を担う医師が当院で活躍していただけることを切望しております。令和6(2024)年3月の新幹線延伸で、福井と金沢、東京は大変近くなりました。金沢大学ご出身、金沢大学関連医局ご出身者の先生方、当院は大歓迎ですのでいつでもお声掛けください。お待ちしております。

最後になりますが十全同窓会のますますのご発展をお祈りし、稿を終えます。

(院長 小松 和人：記)

概要

日本赤十字社 福井赤十字病院

所在地 福井県福井市月見二丁目4番1号

病院長 小松 和人

病床数 529床

(一般520床 結核5床 感染4床)

診療科 25科

沿革

大正14年4月 日本赤十字社福井支部病院として現在地に開院。内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、138床、薬剤科、事務科、救護員養成部、職員数69人

併せて救護看護婦養成開始
昭和18年6月 福井赤十字病院と改称
昭和47年1月 人工腎臓室(透析室)を設置
平成16年3月 新本館竣工、電子カルテ導入
平成27年2月 先進中央棟竣工
平成27年4月 緩和ケア病棟開設
令和7年4月 開院100周年を迎える予定

教室だより

免疫学

研究

免疫学分野では、細胞が放出するナノレベルの微粒子である「エクソソーム」の研究に取り組んでいます。エクソソームは、脂質二重膜に包まれた細胞外小胞で、放出細胞由来のタンパク質、脂質、RNAなどの分子を含んでおり、これらを介して細胞同士の情報交換を担う新たな情報伝達媒体として注目されています。私たちはこれまで、エクソソームの生成や他の細胞への受け渡しを制御する分子を同定してきました。これを手掛かりに、免疫制御、がん進展、神経変性などにおけるエクソソームの機能に関して、新たな知見を多数得ています。

さらに、エクソソームに含まれる分子は、健常細胞と疾患細胞とで構成が異なることが示されています。この特性を活かし、血液や尿中のエクソソームの解析を通じて、がんや認知症など各種疾患の早期診断法の確立が期待されています。私たちは、エクソソームを用いた診断技術の開発にも取り組んでおり、高純度のエクソソームを捕捉し、高感度に検出する検査キットを企業と共同で開発しました。この検査キットは、他の手法に比べて高品質のエクソソームを簡便に採取し解析できるため、世界中の研究者に利用が広がっております。



ナノ生命科学研究所



医学系・先進予防医学研究センター

教育

医学類・医薬科学類において、「免疫学」の講義と実習を担当しています。全て英語教材を使用していますが、わかりやすい図を多用した教科書を使い、丁寧な説明に努めることで、学生たちは複雑な免疫機構を理解してくれていると感じています。さらに、大学院教育では、卓越大学院プログラムのコーディネーターを務めています。金沢大学が誇るナノ解析技術を活用して、革新的な予防・診断・治療法の開発を担う「技術に強いナノ精密医学プロフェッショナル」と「医学に強いナノ精密理工学プロフェッショナル」の育成に力を注いでいます。また、研究室には、医学類・医薬科学類だけではなく、理工や融合学域からも学類生が積極的に参加し、研究に取り組んでいます。

今後の展望

エクソソームは、さまざまな機能分子を運ぶ天然のデリバリーシステムであり、

その活用による創薬開発が世界的に加速しています。昨年、私たちはレギュラトリーサイエンスの専門家と協力し、医薬品医療機器総合機構(PMDA)を通じてガイドラインを公表するなど、その実現に向けた体制整備を早急に進めています。遺伝子改変技術により機能を付加したエクソソームを用いて、「がん細胞のみを特異的に攻撃する細胞傷害性T細胞」や「自己免疫疾患のみを特異的に抑制する制御性T細胞」などを体内に効率的に誘導する新規免疫制御法の開発に取り組んでいます。現在、国内企業数社と協力して、高機能・高品質なエクソソーム製剤の実現化を目指しています。がんや感染症、自己免疫疾患、アレルギーなど種々の疾患に対する効果的かつ副作用の少ない日本発のエクソソーム創薬を実現するために、最大限の努力を継続してゆく所存です。十全同窓会の諸先生方には、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

(華山 力成：記)

スタッフ

教授	華山 力成	技術補佐員	4名
准教授	山野 友義	博士課程学生	10名
	平安 恒幸(先進予防医学研究センター)	修士課程学生	1名
助教	河原 裕憲	学類生	10名
特任助教	吉田 孟史(ナノ生命科学研究所)		
	呂 夏氷(ナノ生命科学研究所)		
	ボリドン・ディリラバ(ナノ生命科学研究所)		

研究分野の沿革

2015年6月、分野再編により免疫学分野が新設され、大阪大学免疫学フロンティア研究センターの独立准教授であった華山力成が初代教授に就任しました。同時に、先進予防医学研究センターの免疫・マイクロバイオーム部門も担当しています。2017年には、世界トップレベル研究拠点(WPI)として発足したナノ生命科学研究所への異動により、医学系との併任となり、現在に至っています。

整形外科学



はじめに

金沢大学整形外科では教室の方針として、大学病院、各診療科、関連病院勤務医師、開業医師、基礎研究室、医療スタッフ、医学生など、気軽に情報交換ができる風通しの良い教室運営に取り組んでおります。

診療

整形外科は大きく7つのグループがあり、最先端の整形外科医療を提供していきたいと思っております。現在当科で行っている代表的な疾患、治療をご紹介します。

脊椎腫瘍、脊柱変形、脊柱靭帯骨化症：当院では脊椎腫瘍を全切除する手術を世界に先駆けて開発し、その治療経験と成績は国内トップクラスとなっています。また、側弯変形に伴う痛みや神経障害に対して、小児から高齢者まで幅広く治療を行っています。

骨悪性腫瘍の患肢温存手術：仮骨延長術を用いた悪性骨腫瘍再建術、液体窒素処理骨を用いた悪性骨腫瘍再建術などの画期的でオリジナリティの高い治療を行っています。

コンピューター・ロボット支援手術：コンピューター支援下の手術加療を行っています。コンピューター技術による情報を加えることにより、治療全体の正確さと精密さの向上を目指しています。またロボットによる人工関節手術も導入しています。

スポーツ傷害の治療と予防：幅広い選手のスポーツ傷害の治療と予防を行っています。先端的な技術を用いて、早期競技復帰およびスポーツ傷害の再発防止に取り組んでいます。

手の外科・マイクロサージャリー：微細な血管や神経などの組織に対する愛護的な操作を行うため、拡大鏡や手術用顕微鏡を用いて手術を行っています。腫瘍や外傷に伴う軟部組織欠損に対する組織再建術についても積極的に取り組んでいます。

足の外科：反外母趾、変形性足関節症などの足部疾患に対して、最適・最新の治療を行っています。

教育

医学類教育では金沢大学憲章である“地域と世界に開かれた教育重視の研究大学”を基本に、学生自身が「自ら学び自ら育む」ことができる教育環境を構築し、金沢大学で学んだことを誇りに思えるよう教育したいと考えています。サブスペシャリティーローテーション期間中には、ベッドサイドでの患者診察や手術参加に加え、英語カンファレンスを通じて英語医学教育も積極的に行っております。また卒業後教育では、人格を備えた倫理観の高い医師の養成、基礎的・臨床的な知識と技術を習得できる指導、研究に対してリサーチマインドを常に持ちつづけ、創造性と国際性を兼ね備えた医療人の育成に取り組んでおります。整形外科は守備範囲の

広い領域を扱っているため、各領域のスペシャリストを育てると同時に、基幹施設とも連携しながら整形外科としての基本となる四肢・脊椎外傷や高齢者の変性疾患等にしっかりと対応できるバランスの取れた整形外科医師を多く育てることで、過疎地域も含む北陸全域の外傷・救急医療の担い手を育成に取り組んでおります。

研究

高いレベルでの研究を実践するため、学内基礎教室や国内多施設との共同研究は必須であり、オールジャパンとして世界に発信できる研究に取り組んでおります。現在取り組んでいるテーマとしては、骨に対する液体窒素処理および凍結免疫に関する研究、高圧処理骨に関する基礎研究、医工連携による脊椎、四肢骨に関する力学解析、骨軟部腫瘍・がん転移の骨転移に対する新規治療法の開発、脂肪由来幹細胞を用いた、骨・神経・軟骨など、運動器の再生医療、骨癒合促進法の開発、抗菌インプラントの開発に関連した基礎研究に取り組んでいます。

おわりに

北陸の整形外科医療の発展のため、教室員一同、診療・教育・研究を精力的に取り組んでまいります。今後とも十全同窓会の先生方からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(出村 諭：記)

スタッフ

教授	出村 諭
	林 克洋(保健学類理学療法学専攻)
	多田 薫(保健学類作業療法学専攻)
特任教授	松原 秀憲(地域未来医療整形外科講座)
准教授	加畑 多文(整形外科)
	加藤 仁志(リハビリテーション部)
講師	八幡 徹太郎(リハビリテーション部)

助教	中瀬 順介、三輪 真嗣、井上大輔、谷口 裕太、赤羽 美香
特任助教	横川 文彬(地域未来医療整形外科講座)
医員	23名
	医学博士課程 21名
秘書	6名
技術補佐員	1名

研究分野の沿革

金沢大学整形外科学教室は1953(昭和28年)年に開講し、初代高瀬武平教授、第2代野村進教授、第3代富田勝郎教授、第4代土屋弘行教授が就任され、整形外科学分野の発展に大きく貢献されました。2023年に出村諭が第5代教授に就任し、現在に至ります。

支部だより

福島支部

令和5年11月22日(水)午後7時より、令和5年度十全同窓会福島支部総会が福島県福島市「おりおり」で開催されました。

令和時代となってから初めて、5年ぶりの開催となりました。元年10月12日に福島支部総会を予定しておりましたが、台風12号が接近しており、11日に東北新幹線、在来線ともに12日の終日予定運休が発表されました。そのため、前日の11日に中止を決定しました。その後まもなくコロナ禍となり、開催できずにおりました。

今回は、福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座教授室野重之先生(平成4年卒業)耳鼻咽喉科学講座教授に、「頭頸部癌の新たなリスク因子としてのHPV」という

タイトルでミニレクチャーしていただきました。HPVが引き起こす中咽頭癌が日本を始め、世界で急増しています。特徴としては男性に多く、HPVワクチン接種が発生率の減少に有効であります。しかしながら、日本では男子へのHPVワクチン接種は定期接種にはなっておらず、そこが課題ということです。

会務報告、懇談となりました。それぞれ専門科が違い、福島県は広いので、顔を合わせるのが本当に5年ぶりというのがほとんどで、近況報告しているだけで時間がすぐに過ぎてしまいました。

その中で、本間達也先生から、金沢大学前学長の山崎光悦先生が福島国際研究教育機構(F-REI：エフレイ)の理事長に就任された事が伝えられました。F-REIとは、福島をはじめ東北の復興のために日本の科学技術力・産業競争力強化を牽引し、特に福島の実験災害(震災+原発事故)からの「創造的復興の中核拠

点」となることを目指し、F-REIの研究基盤として、放射線科学(核物理学、放射化学、放射線環境科学、核医学・創薬、電子デバイスなど)の利活用や放射能汚染環境の動態計測に関する研究課題を基盤に据えながら、ロボット・ドローン技術や次世代農林漁業及びクリーンエネルギーなど産業創生を牽引する最先端研究を推進するとされています。福島第一原発のある双葉町の隣の浪江町に建設予定です。廃炉に向けての放射性物質の取り出しなどの作業はこれからです。

今回の報告を早くしなければと思いながら年が明け、能登半島地震が起きてしまいました。犠牲となられた方々に、謹んでお悔やみを申し上げますとともに、被災されました皆さまに心からお見舞い申し上げます。大きな災害のため復興には長い時間がかかると思いますが、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

(竹田 洋介：記)



写真 後列左から：竹田洋介(昭和60年卒業)、本間達也(平成24年大学院修了)、野澤靖美(昭和53年卒業)
前列左から：清野弘明(昭和60年卒業)、斉藤光正(昭和41年卒業)、室野重之(平成4年卒業)

クラス会

90歳の同窓会

コロナ禍が5種となり、私共昭和33年卒業生も90歳代となるので、延期されていたクラス会を呼びかけることとした。この間物故者9名、居所不明者2名、無回答者7名で、結局5名から出席の返答を得た。しかし、直前に一人が体調不良で欠席となり、金沢からの大場、北川、富山からの品川、辻の4名、奥方に先立たれた品川くんを除き、奥方同伴で富山駅近くの旧名鉄ホテルでの昼食会となり、和やかに、かつ熱く語り合うことができた。

原案では、旧友の加藤幸三君の祖父(京都大学卒業、同地で開業医をされていた幸次郎氏)が、故郷の神通川が開く富山平野の扇の要に当たる大沢野町に、京都の嵐山を模して大枚の私費を投じて造られた寺家公園の紅葉を愛で、近くの春日温泉で泊まるというものであったが、残

念ながら案内役を期待していた加藤君(島田市で開業)の来富が叶わず、人数も最小限となったのであった。

コロナ禍の少し前の本同窓会会報に私共の数年先輩が5名でクラス会を開いた

という記事がありましたが、80歳代ではそういうもののようで、後輩諸君の参考になればとの思いで記した次第である。

(北川 正信：記)



33会 2023年11月7日 クラス会(ホテルグランテラス富山)

出席者：大場夫妻、品川、辻夫妻、北川夫妻

物故者(2022年以降)：荒川、伊崎、坂本、竹山、篁、寺尾、濱家、林、三木
欠席(返信者)：浅井、五十嵐、石黒、一色、小川、角家夫妻、加藤、許田、竹内、竹下、中条、
富原、永倉、鳴河、升田、山本、湯浅、柳沢(岡部)

居所不明者：高田、古本

無返信者：7名

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、
寄稿をお待ちしております。

〒921-8640 金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

クラス会

天孫会

(昭和42年医学部進学同窓会)

令和5年10月28日(土曜日)。天孫会(昭和42年医学部進学同窓会)を福井県のユアーズホテルフクイで開催しました(福井県幹事、有賀藤一郎、岡田忠彦、北村秀夫、平谷美智夫、葉袋俊次、宮地裕文、山内茂樹)。本来であれば昭和40年入学、昭和46年卒業ではありますが、当時は学園紛争が激しく我々のクラスは卒業が延長し、昭和46年6月から昭和47年3月に別れてしまいました。そのため昭和42年進学でまとまりました。天孫会の由来は、クラス担任の細菌学の故西田教授がクラス会で“テンションをもって生きよ”と言われたことをもじって川崎君らがこの会を“天孫会”と呼ぼうとしたことによります。

今回のコロナのこともあり前回の富山から5年ぶり会となりました。参加は、遠くは沖縄から喜屋武君をはじめ32名、夫婦で参加が3組(今村夫妻、小関夫妻、

葉袋夫妻)でした。

平谷君の司会で始まりまず物故会員に黙禱をささげた後、葉袋君の乾杯の音頭で会が始まりました。50数年ぶりに参加した人や若い時とすっかり変わって、初めは誰だかわからなかったこともありましたが、すぐに学生時代に戻りアルコールが進むにつれ話が弾みました。今回は時間を十分にとり一人一人近況や実績、自慢話を報告してもらいました。みんな喜寿を超え持病や救急車で運ばれ急死に一生を得た話もありましたが、なんらかの持病を抱えながらも参加者のほとんどは元気で毎日の診療を行い、まだまだ現役で活躍している頼もしい状況で、息子さんや娘さんが跡継ぎで一緒に悠々自適に診療しているという羨ましい話もありました。また、大阪から参加した小山春海君から、手作りの豆を全員にいただき後日美味しくいただきました。最後に葉袋君が人生を歌った(雨上がり)を、学生時代に通った桜咲く美しく懐かしい石川門や金沢城のビデオを背景に見事に歌いあげ、みんなに感動を与えてくれました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、

次は沖縄か金沢での再会を約束して、宮地君の中締めの挨拶で会を終えました。

引き続き、会場を浜町の和風ラウンジ(日々)に移し2次会に入りました。ほぼ全員の参加で、芸子さんの優雅な踊り、絵勇壮な太鼓、三味線演奏を楽しみながら福井の地酒や洋酒を堪能しました。カラオケもあり庄巻は大原君のプロの三味線をバックに見事に(山中節)を歌い上げ喝采をえました。ここでも夜遅くまで話が盛り上がりました。

次の日は、前夜の雨もすっかりあがり晴天の下、福井観光の定番の恐竜会館、永平寺、朝倉遺跡めぐりと芦原ゴルフクラブでのゴルフ組に別れ休日を楽しみました。

最後に、この原稿を書き上げ正月過ぎに送ろうと思っていましたところ、元旦に思いもしない多数の家屋損壊や死傷者を出した能登半島地震が起こりました。心よりお見舞い申し上げるとともに、1日でも早く平穏な日常を取り戻されるようお願い申し上げます。

(岡田 忠彦：記)



謝 恩 会

令和6年3月21日、ホテル日航金沢にて令和5年度金沢大学医学類卒業謝恩会を開催いたしました。5年ぶりの開催となった今回、先生30名、学生107名の計137名にご参加いただきました。ご臨席いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

元日に発生しました能登半島地震を受け、謝恩会の中止も検討いたしました。コロナ禍に苦しんだ学年であり、最後に皆で集まれる機会を大切にしたいとお声をいただき、予定通りに開催できましたこと、大変有り難く、嬉しく思っております。

本年の卒業謝恩会は、15名の謝恩会委員とホテル日航金沢の皆さまのご協力のもと、昨年9月より準備してまいりました。久しぶりの開催であり、「参加者全員がこの6年を振り返り、心から楽しむことができる会」を目標に、自由な立案を進めてまいりました。

当日は学年代表の浜木による開会のご挨拶で開宴しました。続いて、医学類長の杉山和久先生、医薬保健学域長の堀修

先生、金沢大学附属病院長の蒲田敏文先生、医王保護者の会会長の土山寿志先生よりご挨拶をいただきました。皆さまより、国家試験合格、そして卒業に対するお祝いのお言葉と、これから医師となるにあたっての心構えをご教授いただき、これからは本当のスタートなのだと、身の引き締まる思いでした。

各テーブルの先生のもとには、3年次の基礎配属または6年次のプレ・インターンシップで特にお世話になった学生が集い、思い出話に花を咲かせました。余興として「金沢大学医学類謝恩会模試」と題したクイズ大会も開催されました。医師国家試験さながらの問題冊子に、事前に先生にお答えいただいたアンケートなどから得た情報をふんだんに取り込んだクイズ問題が並び、先生と学生が協力して、楽しく時に真剣に解答を考える姿が印象的でした。合間には学生によるコント動画やダンス動画も流れ、会場全体が笑いに包まれました。

その後は、教育委員長の本山靖彦先生からもお言葉をいただき、この6年間

が、我々学生により良い教育を、という先生方の熱い想いに支えられたものであったことを改めて実感いたしました。そして、学年代表の彦田より閉会のご挨拶をさせていただき、最後に今年ご退任された先生方に花束を贈りました。

盛況のうちに閉会の時を迎えることができ、会の開催にあたってご協力いただいた全ての皆さまに改めて心より感謝申し上げます。

この4月より我々は全国各地で医師人生をスタートいたします。それぞれが違う道を歩み始めても、この金沢大学で出会った恩師や友人との縁を今後も大切にしていきたいと心から思います。そして、金沢大学卒業生としての誇りを忘れず、医療に貢献できるよう邁進してまいります。十全同窓会の皆さまにおかれましては、今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

(令和5年度卒業謝恩会実行委員長
彦田 藍子：記)



学生課外活動報告

白山診療班

白山は、富士山、立山と並ぶ日本三霊山であり、古くから現在に至るまで多くの人に愛されています。白山診療班は、白山室堂ビジターセンター内の診療所で活動を行う、歴史ある団体です。夏山期間に医師や医学生が診療所に滞在し、体調を崩した登山者の方々や室堂スタッフの対応にあたっています。医療行為は正班員である医師に限られて行われていますが、学生も診療活動を手伝い、医師の側で診療の方法や心構えなどを学びます。ただ、医師が診療所に滞在しておらず、学生のみで対応しなければならない期間もあります。その際には、必要に応じて先生方に電話で相談させていただきながら、医療面接などできる限りの対応を行っています。正班員である先生方におかれましては、お忙しい中、入山時や電話相談時など多岐に渡って活動にご尽力いただいております。この場を借りて深く感謝申し上げます。

室堂までの道のりでは、白山の雄大な自然に思う存分触れることができます。足を進めるほどに感じる疲労感も、振り返ると目に入る景色の美しさが忘れさせてくれます。先生方や同期、先輩後輩と一緒に山を登り、感動を分かち合うこと

は、普段の学生生活では得難い経験です。そして、室堂に到着した後は、診療所に滞在する医療者としての行動を求められます。提供できる医療物資や医療行為が限られている中でも可能な限りの対応を行うことは、迅速な初期対応として必要なだけでなく、登山者に安心感をもたらすことに繋がります。また、低学年でも患者さんと接し、診療行為に関わる経験は、普段の学びの意欲を一層高めてくれます。昨年診療所にいた自分と比べて、次の夏はどのように成長した自分でいられるか、また、理想とする姿には何が足りていないか、山の上で過ごす時間の中で多くを知ることができます。このように、白山の自然に囲まれながら、責任感

を持って診療に関わる一夏の経験は、とても新鮮で、多くの学生の心に強く残ると思います。

夏山期間終了後には、入山した学生が集まり反省会を開いています。コロナ禍を経て活動が本格的に再開され、指摘された改善点も多くあります。今後、診療班の活動により多くの学生や先生方に携わっていただけるよう、診療所内の環境整備や柔軟な日程調整に努めてまいります。

最後になりましたが、十全同窓会の皆さまには日頃よりご支援を賜り感謝致しております。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

(医学類5年 森戸 佳奈：記)



立山診療班

富山県東部にそびえる立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高3000メートルの天上界で、年間約100万人もの観光客が訪れます。私たち立山診療班は7月下旬から8月下旬の約1カ月の間、立山で起こる登山客や観光客の疾病や事故に対し、富山県警察山岳警備隊、周辺の山小屋や環境省の方々のご協力のもと、山岳診療所にてボランティアで診療活動を行っています。室堂・雷鳥沢・剣沢の合計3カ所の診療所には、夏休みの1カ月の間に、例年100名ほどの患者さんが受診されます。

今年度は学生39名が診療所に入り、診療活動にあたりました。診療所では診療活動自体は医師が行い、学生は診療の補助を行うという体制をとっています。しかし、学生が主に滞っている雷鳥沢

診療所は医師不在の場合も多いため、学生は自分たちで問診をとったり、医師に電話で指示を仰いで対処したり、雷鳥沢から室堂に滞在する医師のもとへ患者さんに付き添って一時間ほどの道のりを歩いたりすることもあります。医師不在の状態でも患者さんを円滑に診療に繋げるため、なるべく班に1人は上級生がいるようなシフトになっています。また、空いた時間に班員同士で問診の練習をすることもあります。実際の臨床現場を体験し、患者さんへの接し方を学ぶ機会は、学生たちにとって非常に貴重で有意義なものとなっています。また、診療所での生活では、診療活動の補助だけでなく、山小屋の食事の準備や掃除を伴う共同生活や山への散策なども重要な要素となっています。立山は雷鳥沢を取り巻くように数々の山が聳えています。登る山を選び、タイムスケジュールを組んで、危険箇所を考え、苦勞して登った際の達成感は何物にも変え難く、またその過程で管理所を訪れる登山客の方々へのナビ

能力も身につきます。そして、先生方や山小屋の方々、同級生、先輩後輩、患者さんや他大学の山仲間との出会いと関わりの中で、勉学とはまた違ったものも学ぶことができます。この会報をご覧の診療班卒業生の皆さまも、学生時代を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いです。今年も例年通り20名ほどの先生方が参加され診療にあたられましたが、三つの診療所を抱える立山の診療には、より多くの先生方のご協力が必要だと感じております。もしご興味ございましたら、立山診療班 kum.tateyama3015@gmail.com までご連絡ください。先生方と山小屋で一緒にできる日を心待ちにしております。最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆さま、十全同窓会の皆さまのお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができましたことを、ここに厚くお礼申し上げます。

(医学類6年 川端日向子：記)



金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告(その12)

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自身の体験などを1つ選び、人は死までをいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」という課題を与えており、令和5年度5年生も熱心に課題に取り組んでくれました。本稿では2名(安村大樹君、原口葵さん)のレポートを紹介します。(写真1、2)



写真1：令和5年度C班の実習記念写真
後列：蛭名、宮下、清水、齋藤、古崎、筆者
前列：由田、河合、安村、川原

1) 医療の源流

1年2カ月ほどの臨床実習の間にも、多くの死に直面してきた。救急搬送された心肺停止の患者や、悪性腫瘍にて余命宣告を受けた患者などである。今回の実習では、ドキュメンタリー映画「四万十：いのちの仕舞い」を紹介した。高知県四万十市で訪問診療をおこなう小笠原医師と人々との交流が描かれる。四万十で「いい仕舞い」とは、食べられて、痛くなくて、話ができ、なじみの人の中で最期を迎えることを意味する。

嶋崎静子さんは、死の3日前に「痛くもないし、苦しくもない、目も見えるし、耳も聞こえる。鱈(ぶり)の刺身を食べたいけど、食べても味が無いし、味が分かりたいね」と話し、小笠原先生は「分かった、味がわかるように薬など考えようかね」と応える。彼女は最期まで食事を楽しみたいと願い、それを言葉にして自然に亡くなった。夫が「穏やかにスッとやったね」と、にこやかに回想する場面が印象に残っている。

研修医になると検査や治療に忙殺され、死にゆく人への対応を後回しにしてしまい、葛藤する日々が続くかもしれない。忘れていけないのは、誰もがいつかは必ず死に、その死を判断するのも医師であるということだ。人は、生まれる時も生きる時も死ぬ時も、医療と関わる。医療



写真2：谷口教授、原口、筆者

の主流が治療であるとしても、その源流は「いい仕舞い」にあると感じている。

2) 谷口教授の実習から 生と死を考える

ロシアの文豪トルストイは「懺悔」の中で、自身の人生を「一切がごまかしだ」と語った。これは、死を前にした人生の無意味感と絶望の言葉であり、死に直面した人に共通する感情ではないかと感じた。人生を無意味だと感じるのは、未来に「死」という大きな不安があるからではないだろうか。

未来が不安なことによる今の不安は、金大医学生なら麻酔科蘇生科谷口教授から課せられるレポートなどで実感できる。明日に谷口教授の実習が控えていたら、カラオケや友達との会話も楽しめない。多くの人に共通する未来の最大の不安が死であり、未来の不安がある限り今まで楽しめていたことも楽しめなくなる

のだ。

それならば死を前にしても変わらない幸せは何だろうか。これこそが哲学の歴史の中で語られてきたテーマであり、パスカルは「最高善」と言い、経典では「破闇満願(はあんまんがん)」と説いている。死を前にしても不変の幸せがあれば、意味のある人生だったと思えるだろう。人生は各人によってさまざまな意味がある。我々は、自分自身でもこれらを考え、他者がこれらを考えられるように支援することが必要である。

以上から医療者ができることは、1) まずは医療者自身が人生の有限性を知り、今やるべきことを考えること、2) 患者さんが死を前にしても楽しめることを、共に語り考えること、3) それを楽しむために苦痛を和らげること、これらが死を前にした苦境の中を生き抜くために必要なものだと思う。

金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告(その13)

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

令和5年度にも石川県高度・専門医療人材養成支援事業と北國がん基金(啓発活動部門)の助成を得て、令和4年度医学類5年生全員のレポートを「金沢大学医学生と「生と死」を考える(第12号)」として編集し、卒業式で全員に配布した(図1)。本稿ではこの中から笹木仁一郎先生(現・金大病院初期研修医:泌尿器科専門コース)のレポートを紹介する(写真1)。

1) On death and dying

(死ぬ瞬間:死とその過程について)

E・キューブラー・ロス著

死の過程における第五段階「受容」について、人はどのようなイメージを持っているだろうか。私は「否認」「怒り」「取り引き」「抑うつ」の四段階を経て、迫りくる死という現実を理解し、前向きに生きていこうとする状態だと認識していた。しかし著者は、「受容とは、絶望的な放棄を意味するものではないが、感情がほとんど欠落した状態であり、幸福な段階と認識してはならない」と述べており、私のイメージとは全く異なるものであった。医療者は、「受容」段階の患者と同じような、感情が欠落した状態へ降りていくことはできない。彼らに対してどのようなコミュニケーションを取ればよいのだろうか。

私は、患者さんを観察するようなコミュニケーションも大切なのではないかと思った。これは患者さんを遠くに放棄することではなく、黙って側にいて、一緒に窓の外の景色を眺めるといったような、言葉だけに頼らない対応のことである。死の過程は、体験している人にしか分からないことなのだが、瞬間瞬間において少しでも分かってと努めるように対応したい。

2) 憂鬱になった人に私が言えるのは一言しかない。「遠くを見なさい」ということだ (アラン、フランスの哲学者)

筆者が、笹木先生のレポートから思い出したのが、表題の哲学者アランの言葉である。「目や頭や心が癒されるのは大きな空間を見渡す時である。星や水平線を眺めるとき、目はのんびりとくつろぎ、頭は自由になり、全身がくつろぎ内臓もゆったりする。自分のことを考えるのはやめて、遠くをみることである」と続いていく。

この言葉に科学的な根拠はなくても、直感的に理解しやすい。悩みを抱えた人



図1: 金沢大学医学生と「生と死」を考える(第12号)の表紙
後列: 太田(麻酔科蘇生科)、灰野、浜木、若山、筆者
前列: 佐伯(専門看護師)、吉年、上野、清水、矢島(麻酔科蘇生科)



写真1: 筆者、笹木、酒徳(泌尿器科)

は目の前の問題しか見えなくなり、その不安に押しつぶされてしまう。医療者も目の前の患者と病室しか見えないままでは、嫌気がさしてしまい、足は遠のくばかりである。落ち込んだ時には、できるかぎり広々とした空間にでかけるべきであり、病室から出られない時でも何らかの工夫が必要なのである(広々した時間を考えるのもよい)。

「金沢大学医学生と「生と死」を考える(第12号)」に掲載された医学生のレポートは、金沢大学を卒業して30年以上が経過した筆者にもさまざまなヒントを与えてくれる。この実習のおかげで、筆者は長く緩和医療の現場で働くことができ、医学生の皆さんに感謝している。

学生コーナー

臨床現場でしか学べないこと

医学類5年

木村 拓登

CBT・OSCEに無事合格し、10月から臨床実習が始まりました。実習が始まった当初はCBT対策で学んだ教科書上の知識が実際の患者さんにはどれだけ当てはまるのだろうかと考え、自分の知識を確認したい一心で実習に取り組んでいました。そんななかある症例を通じて実習でしか学べないことが数多くあることに気付かされました。

その症例はアルコール性肝硬変の患者さんで、これまでも複数回の入院歴がある方でした。主治医の先生は患者さんにこれまでに何度も危険な状態にあるため飲酒をやめるように注意してきましたが、なかなか飲酒をやめることができいないとのことでした。その患者さんが私の受持ちとなり、毎日診察を行わせていただくこととなりました。その患者さんに飲酒習慣について尋ねたところ、昔はよく飲んでいましたが最近ではあまり飲んでいないとのことでした。その旨を先生に伝えると、先生は肝障害の状態を踏まえると、患者さんは本当のことを言っていないと考えているとのことでした。そこで本当の飲酒習慣を聞き出すた

めにどうすればいいのか思案していたところ、先生は患者さんの周りの人の飲酒習慣についても聞くようにとのアドバイスをしてくださりました。実際に聞いてみたところ、患者さんはためらう様子なく、旦那さんがよくお酒を飲まれる方であると教えてくれました。また、会話を通じて日常的に夫婦で飲酒を楽しんでいるであろうことが感じ取れ、患者さん自身もやはり多量の飲酒をしていることが推測されました。周りの人の飲酒習慣についてはスラスラと述べてくださる様子を見て、本当の飲酒習慣を教えることで医師に咎められることを警戒しているのかもしれないと気付かされました。このように知りたいことを直接聞けない場合に、質問の仕方を変えてみるというのは日々の臨床現場でしか身につけられないテクニックであるように思いました。また、このような患者さんが答えやすい質問の仕方を身につけるために、自分が患者さんの視点に立って考える必要があると思いました。これまでは患者さんの症状についてのみ考えてしまいましたが、診療においては患者さんの症状だけでなく、患者さんの背景について考えることも忘れないようにしたいと思います。加えて患者さんにとって話しやすい相手となれるよう日々のコミュニケーションを通じて信頼を得ることを大事にしていきたいと考えます。

患者さんの飲酒状況について確認した後、私はどのようにしたら患者さんに断

酒してもらえるかについて考えました。患者さんはアルコール依存症に陥っている状態でしたが、そこで私は精神科の実習で交流したアルコール依存症を克服された方々を思い起こしました。その方々のようにアルコール依存症を克服できないかと考え、先生にこの患者さんについても精神科での治療を行えないか聞いてみたところ、本人にその意思が無いため行えないとのことでした。私は治療法があるにも関わらず、それを行ってもらえないことへのもどかしさを感じました。ただし、これは私の健康であることが一番という価値観に基づいたものであり、患者さんは異なる価値観を持って判断されているかもしれません。医師は治療法を考えるだけでなく、それが最善であることを患者さんに納得してもらえるよう努力することも求められ、これは教科書では学べなかった難しさであると思いました。

今回の経験から、教科書では学べない重要なことが臨床現場には数多く転がっていることに気付かされました。これからは患者さんの視点に立って考えることを怠らず、患者さんを先生として学習することをより一層大切にしたいと思います。

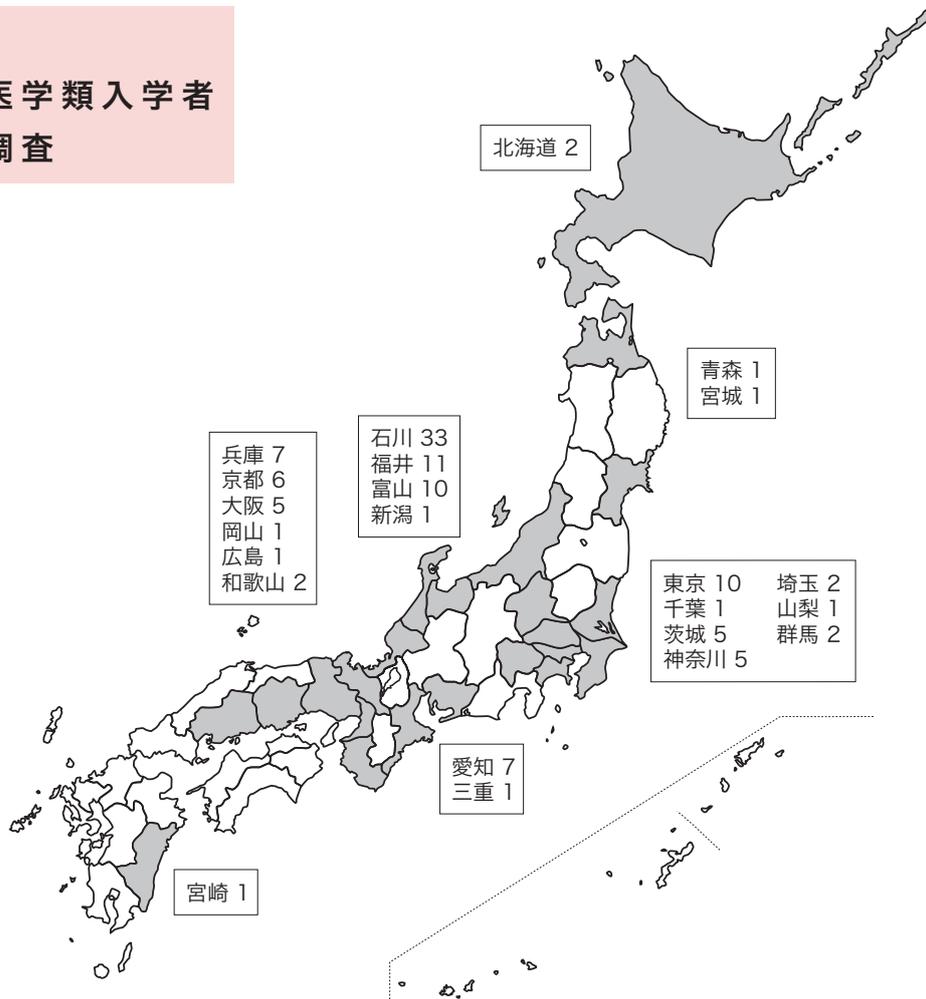
最後になりましたが、日々指導して下さる先生方、私たち学生の実習に協力して下さる患者さん方に感謝しながら、今後の実習で少しでも多くのことを学べるよう努力してまいりたいと思います。



令和6年3月卒業生進路

石川県 (32名)	金沢大学附属病院	15	関東地方 (25名)	上尾中央総合病院	3	北海道地方 (1名)	手稲溪仁会病院	1	
	石川県立中央病院	9		湘南鎌倉総合病院	2		近畿地方 (22名)	市立福知山市民病院	2
	金沢医療センター	2		虎の門病院	1			神戸市立西神戸医療センター	2
	小松市民病院	1		慶応義塾大学病院	1			市立豊中病院	1
	金沢市立病院	1		東京警察病院	1			大阪医科薬科大学病院	1
	浅ノ川総合病院	1		東京慈恵会医科大学 附属病院	1			大阪南医療センター	1
	金沢赤十字病院	1		三井記念病院	1			星ヶ丘医療センター	1
	城北病院	1		順天堂大学医学部附属 順天堂医院	1			京都市立病院	1
	公立能登総合病院	1		東京都立荏原病院	1			京都大学医学部附属病院	1
	富山県 (23名)	富山県立中央病院		14	東京新宿 メディカルセンター			1	京都第一赤十字病院
市立砺波総合病院		3	東邦大学医療センター 大森病院	1	甲南医療センター	1			
富山赤十字病院		3	総合病院国保旭中央病院	1	関西労災病院	1			
富山大学附属病院		1	横須賀市立市民病院	1	姫路赤十字病院	1			
厚生連高岡病院		1	横浜市立大学附属市民 総合医療センター	1	兵庫県立加古川医療センター	1			
富山市立富山市民病院		1	横浜南共済病院	1	兵庫県立丹波医療センター	1			
福井県 (2名)	福井総合病院	1	済生会横浜市東部病院	1	宝塚市立病院	1			
	福井赤十字病院	1	小田原市立病院	1	北播磨総合医療センター	1			
東海地方 (4名)	公立陶生病院	1	戸田中央総合病院	1	奈良県西和医療センター	1			
	静岡済生会総合病院	1	熊谷総合病院	1	済生会滋賀県病院	1			
	刈谷豊田総合病院	1	川崎市立多摩病院	1	神戸大学医学部附属病院	1			
	総合病院聖隷三方原病院	1	深谷赤十字病院	1	中国地方 (3名)	倉敷中央病院	2		
甲信越地方 (2名)	長野赤十字病院	1	霞ヶ浦医療センター	1		岡山大学	1		
	柏崎総合医療センター	1			不明・未定・その他	7			

令和6年度 医薬保健学域医学類入学者 出身都道府県調査



会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。
年額4,000円

①自動引き落とし(手数料本会負担)

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいますようお願いいたします。

②銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
(お振込の際は、ご氏名の前に**会員番号もしくは卒業年**のご入力をお願いいたします)
北陸銀行 小立野支店
普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

③払込用紙(手数料本会負担)

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。
*ゆうちょ銀行は現金による払込みにつき、1件ごとに110円の手数料がご依頼人にかかります。

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL: 076-265-2132 FAX: 076-234-4208 Email: juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

世界中の人々の
より豊かな人生のため、
革新的医薬品に
思いやりを込めて



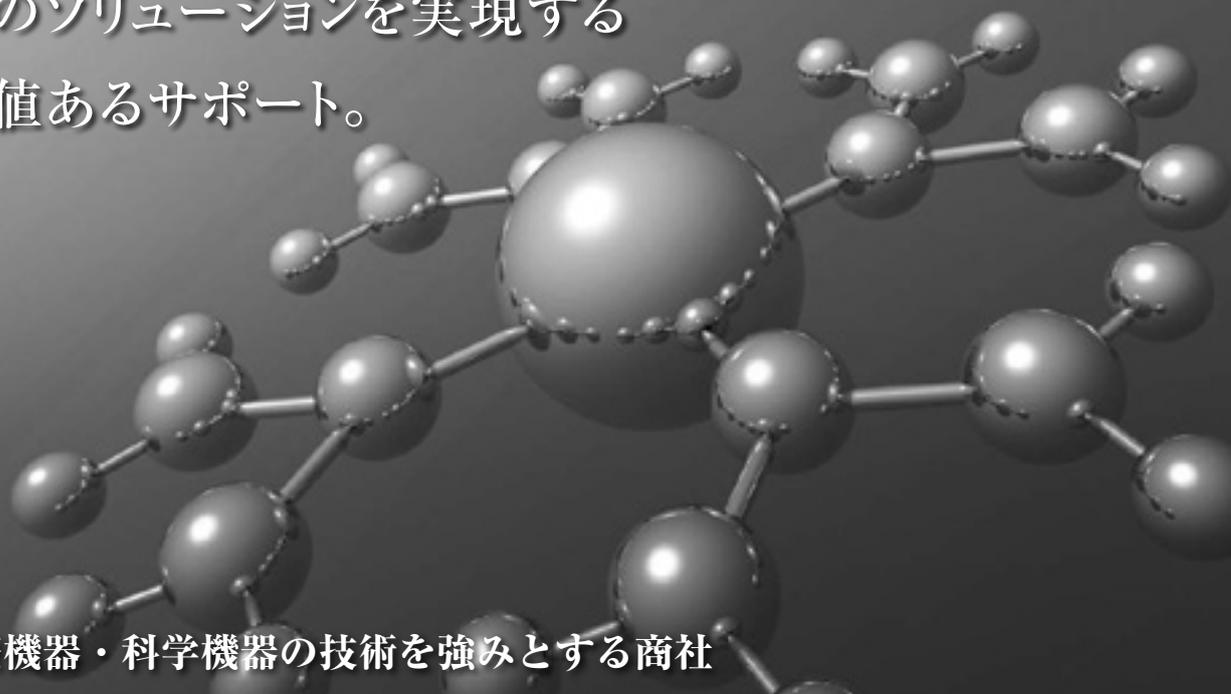
Lilly

日本イーライリリーは製薬会社として、
人々がより長く、より健康で、
充実した生活を実現できるよう、
がん、糖尿病、筋骨格系疾患、
中枢神経系疾患、自己免疫疾患、
成長障害、疼痛などの領域で、
日本の医療に貢献しています。

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

真のソリューションを実現する
価値あるサポート。



医療機器・科学機器の技術を強みとする商社

明日の健康と新産業創造のパートナー

 **丸文通商株式会社**

〒920-0385 石川県金沢市松島一丁目 40 番地
TEL 076-269-1880 FAX 076-269-2522
<http://www.marubun-tsusyo.co.jp/>



医療情報クラウドが、 現場を変える。



AIもセキュリティも、医療情報クラウドで。

医療情報・画像データ等を安全に管理するクラウド機能からAIによる診断支援まで、クラウド型PACS NOBORIのセキュアなネットワーク機能が、これからの医療を支えます。

認証番号：EV Insite イーヴイ・インサイト 227ALBZX00016000

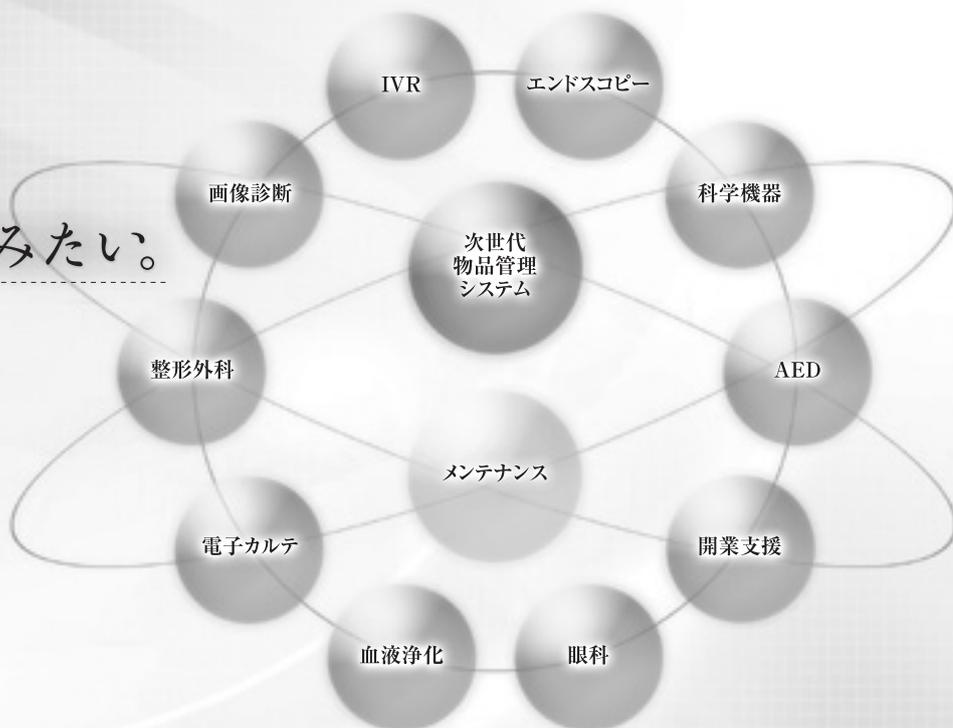


PSP株式会社 〒108-0075 東京都港区港南1丁目2番70号 品川シーズンテラス25階

www.psp.co.jp

PSPとNOBORIは2022年に合併しました。

医療とともに 大きな夢を育みたい。



富木医療器株式会社

<http://www.tomiki.co.jp>

本社 〒920-8539 金沢市問屋町2-46 TEL (076) 237-5555(代) FAX (076) 237-6584
支店 金沢・富山・福井 営業所 七尾・高岡

X線CT装置

SOMATOM Pro.Pulse

Unlock Dual Source CT. Everywhere.

www.siemens-healthineers.com/jp



AIと共に歩む、第5世代 Dual Source CT

Dual Source CT 本来の強みをさらに発展、進化させるシステムが誕生。
最大の強みを発揮する心臓検査は、新機能“ZeeFree”によって洗練され、
Dual Source CT で初めて myExam Companion を搭載しました。
高度化したCTの先進技術をAI技術によりルーチン化し、優れたスループットを実現します。



SIEMENS
Healthineers

全身用X線CT最新装置 SOMATOM Pro.Pulse 認証番号:306A82X00010000

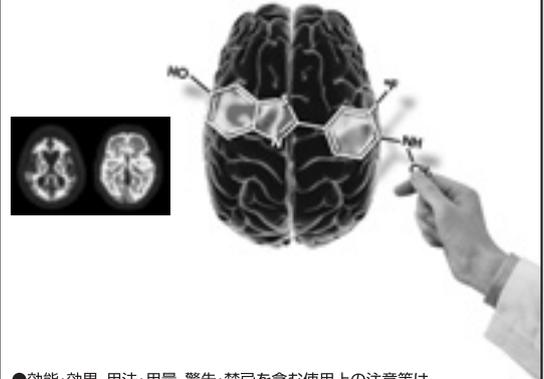
nihon
medi+physics

放射性医薬品・脳疾患診断薬 薬価基準未収載

処方箋医薬品[※]

ビザミル® 静注

放射性医薬品基準フルメタモル(¹⁸F)注射液
注)注意-医師等の処方箋により使用すること



●効能・効果、用法・用量、警告・禁忌を含む使用上の注意等は添付文書をご参照ください。

®:登録商標



資料請求先

日本メジフィジックス株式会社

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号

製品に関するお問い合わせ先 ☎0120-07-6941

弊社ホームページの“医療関係者専用情報”サイトでPET検査について紹介しています。

<http://www.nmp.co.jp>

2024年3月作成

// より良い明日へ

バイエルはイノベーションや治療法の提供を通じて、
患者さんのための治療に変革をもたらす持続可能な取り組みを推進しています。
私たちの目的“Science for a better life”に沿って、人々のクオリティ・オブ・ライフの向上に貢献していきます。

バイエル薬品株式会社 <https://pharma.bayer.jp>

Science for a better life

PP-GEN-JP-0349-29-11

feel so good!

こちよい 時をおくる。

Hotel Nikko Kanazawa 30th



ホテル日航金沢

石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)
Tel: 076-234-1111 Fax: 076-234-8802

会報編集委員の紹介

学内編集委員(22名)

中村 裕之
横山 茂(編集委員長)
絹谷 清剛
佐々木素子
篁 俊成
和田 隆志
太田 邦雄
杉本 直俊
谷口 巧
山本 靖彦(副編集委員長)
和田 泰三
高村 雅之
菊知 充
中田 光俊
安藤 仁
山下 太郎
岡島 正樹
稲木 紀幸
倉知 慎
林 克洋
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
蒲田 敏文
中本 安成
高村 博之
常山 幸一
古川 健治
古市 賢吾
若山 友彦
中西 清香

以上43名で構成されています。



表紙の写真

病院前の「のとキリシマツツジ」

「のとキリシマツツジ」は1730年代に能登へ伝来し、この地域で代々守り育てられたことで、能登半島は日本屈指の集積地となっています。金沢大学附属病院前に植えられた「のとキリシマツツジ」は、樹齢約300年。病院のシンボルです。

題字：山本 健(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<https://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和6年5月27日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

10年間にわたり編集委員長を務めさせていただきました。当時同窓会理事長を務めておられた大井章史教授から指示を受けたものであったように記憶しています。編集委員に加わった直後のことであり、右往左往しながら任に就きました。現在、同窓会として最も懸念されることは、新卒者入会が10%台と著しく低下していることでしょうか。この理由の裏には、保護者の会が学生を手厚く支援しているのに対し(高い会費を集金しているので当たり前)、同窓会は何もしていない(してくれない)という、受け身の思想があるのではないかと感じます。母校愛がない、と言う言い過ぎでしょうか。同じ事が、クラブ活動でも言えるような気がします。コロナ禍のため、数年間、追い出しコンパを

実施できませんでしたが、昨年度久しぶりに実施してくれました。久しぶりにOBたちに会えるかなと思っていたところが、OBで出席したのは部長の私一人と、京都大でラグビーをやっておられた河崎洋志教授の2名のみでした。

私の外来診察室は、よろず相談所のようになっています。うちの旦那がXX癌になったのだが、どうすればいいのでしょうか？うちの息子がダラでよわった、等々、いろんな方が悩み事を語っていかれます。面倒くさがらず、真面目に、時には面白おかしく回答が返ってくるのが良いみたいです。

本学卒業者たちが、患者さんの顔も見ないで、電カル画面に顔を向けたまま診察する医師にならないことを祈っています。

(絹谷 清剛：記)